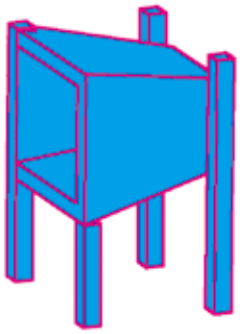
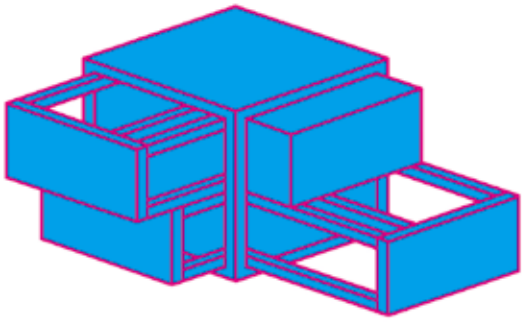


［研究報告－別冊］

2008 年 3 月

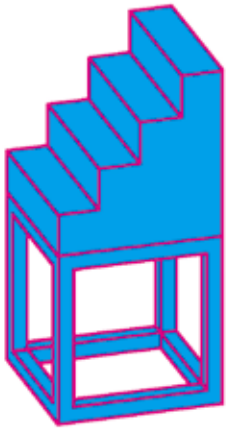


ホスピタリティの研究

～持続型社会の設計原理を明らかにするために～

―ホスピタリティ概念の＜根源＞にあるもの―

講演・取材録



財団法人 ハイライフ研究所

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

2007年度

ホスピタリティの研究

～持続型社会の設計原理を明らかにするために～

―ホスピタリティ概念の＜根源＞にあるもの―

講演・取材録

研究体制

高橋順一　早稲田大学 教授
清家竜介　早稲田大学 非常勤講師,日本経済復興協会特別研究員
足立裕子　有限会社 文化技術デザイン
堀美和子　有限会社 文化技術デザイン
財団法人 ハイライフ研究所

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

2007年度 ホスピタリティの研究 講演・取材録

目 次

はじめに ………………………………………… 1

第1回 ホスピタリティ研究会 「人間とは何か」 ………………………3
講師：立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科教授 内山節先生

第2回 ホスピタリティ研究会 「里山は可能か」 ………………………28
講師：東北芸術工科大学院長・東北文化研究センター所長 赤坂憲雄先生

第3回 ホスピタリティ研究会 「生物学的視点と人間および社会」 …………41
講師：早稲田大学 国際教養学部教授 池田清彦先生

研究会講師プロフィール ………………………………………69

音楽療法士・那須弓子さんとのヒアリングから得られたこと ………………70

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

はじめに

２００７年度における「ホスピタリティにもとづく近代産業社会以降の持続型社会の設計原理およびライフスタイルの提案にむけた研究 」は、三つの柱を中心とする形で行われました。

柱Ⅰ： ２００６年度報告書で提起されたホスピタリティ概念の具体化と肉付けのための作業仮説の内容を、より普遍的なホスピタリティ思想原理へと高めてゆくための**理論的探求作業**です。これに関しては、報告書本編における**「序説」および「作業仮説の補足」**の部分を中心にまとめられました。

柱Ⅱ： **作業仮説の検証のための現地調査およびヒアリングの実施**です。これは、報告書本編の**「作業仮説の事例検証」および「事例検証」**の部分にまとめられています。以上が報告書本編の内容にまとめられた本年度の研究活動の領域ということになります。

柱Ⅲ： 本ホスピタリティ研究にとっての先行研究としての意味合いを持つ優れた成果をあげ、本研究の遂行に当って大きな触発を与えてくれている何人かの研究者に来ていただいて**研究会を開催**しました。研究会では、ホスピタリティ思想原理の形成および作業仮説の理論的深化のために不可欠であると思われる**前提的諸概念（「生命」「場所」「コミュニティ」「贈与」など）の認識を深める**こと、さらにはそうした理論的視点を、**事例検証を通じてより具体的な設計原理や社会構想へとつなげてゆくために必要な、広義の意味でのフィールドワークの方法やそのフィールドワークから得られた内容を分析する上での方向性をつかむこと**が中心的な課題となりました。とくにそこで見えてきたのは、ホスピタリティに基づく持続型社会の可能性を示唆する**「場所」の力という課題**でした。具体的には**「里山」に現れている、「内」と「外」の関わりを制御する機能を備えた「中間領域」**としての場所の力のあり様です。それはそのまま、本研究の中心課題である、近代産業社会の行き詰まりの中で今模索されようとしている別な設計原理に立つ社会ヴィジョンの内容、すなわち「持続型社会」のヴィジョンの内容を明らかにするための最も基本的な前提となります。内山節先生、赤坂憲雄先生、池田清彦先生の研究会でのご報告はいずれもこうした課題に見事に合致した充実したものであったと思います。これによって報告書本編にまとめられた研究内容の方向性が明確なものとなりました。

また研究会とは違うヒアリングという枠組みの中で行われた音楽療法士那須弓子さんのお話も、**報告書本編「序説」の中の「＜声＞の抑圧」「五感」の内容と関連しつつ**、ホスピ

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

タリティの根幹にある、**真に快いものへの「目覚め・気づき」、あるいはそれと生命的なものの根源との関わりに関して重要な問題提起**となっています。同時に那須さんが関わっておられる末期医療の現場から見えてくる生と死の極限的な状況は、私たちの日常性の根源に隠れている「生きること」「死ぬこと」の本来の意味について深く考えさせられるものでした。だからこそ**ホスピタリティの問題は社会的次元からのみのアプローチでは不十分なのであり、この生と死の根源から人間存在のトータルなあり方を見直すという視点が不可欠な要素となる**のです。

本別冊はこうした本研究における研究会およびヒアリングの内容についての報告にあてられています。そしてその内容は今述べてきましたように報告書本編と深い関連を有しております。

【研究会 出席者】

高橋順一　（早稲田大学 教授）
高津春樹　（ハイライフ研究所）
仙洞田伸一（ハイライフ研究所）
萩原宏人　（ハイライフ研究所）
清家竜介　（早稲田大学 非常勤講師, 日本経済復興協会特別研究員）
足立裕子　（文化技術デザイン）
堀美和子　（文化技術デザイン）

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

第１回 ホスピタリティ研究会 「人間とは何か」

立教大学大学院　異文化コミュニケーション研究科教授　内山節先生
2007年7月12日　於ハイライフ研究所

●趣旨

内山節先生は、早くから労働という、人間が社会の中で生きてゆく上で中心となる活動について本質的な考察を行ってきた、たんなる研究者としての立場にとどまらない、本当に自分の頭で考える「哲学者」として日本では稀な存在です。内山先生の労働論の要は、資本制社会の中における労働主体のあり方の本質的な解明と、そこから展望される労働主体の真の解放という課題です。そしてその課題に取り組む過程の中で、内山先生の労働の見方は、資本制社会が強いる狭い労働概念から、より幅広い人間の存在そのものに根ざした労働概念へと移行してゆきました。労働主体の解放は何よりも人間の存在そのものの解放でなければならない、というのが内山先生の思想的出発点となってゆきます。その一方この頃から内山先生は日本全国の山村をめぐりながら、資本制社会において忘れられていった村落や里山の生活に目を向けてゆきます。その中で内山先生は新たに「協同社会」の構想へと向かわれました。資本制社会を軸とする近代社会において生じた自然環境の収奪・破壊やコミュニティの解体、人間存在の貧困化に対抗する原理として、文明そのものの根源的な組み替えを展望する協同社会の構想は、私たちの研究にとって重要な意味を持ちます。それは循環－持続型社会の実現のための大きな指針であるからです。本日は内山先生のこれまでのそうした思想的歩みを踏まえながら、私たちの掲げる「循環－持続型社会実現の原理としてのホスピタリティ」という視点に対して、ご自身の山村体験、あるいはその背後にある哲学的認識に基づいた問題提起をいただければと考えました。

テーマ：「人間とは何か」

高橋：立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授の内山節先生をお迎えして、ある意味では非常に大きな「人間とは何か」というテーマでお話いただきます。

私たちのホスピタリティ研究は、個人のレベルから社会総体のレベルまで根本的なデザインの変更、組み替えを含んだ非常に大きな課題であります。逆に言うとそうした可能性を含みうるものであるからこそ、我々は「ホスピタリティ」というものにアプローチしているのだとあらためて思っている次第です。

内山先生は早くから著作活動をされていて、労働の問題、社会の問題について本質的な考察を早い時期からされており、さらに日本の山村を中心とする様々な地域に足を運ばれ、

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

その中から見えてきた日本の社会や文化論について非常に精力的に考察をすすめられてきました。

今日も何冊か著作をお持ちしてきました。例えば最近の『市場経済を組み替える』『農の営みから』『地域の作法から』などですが、こうしたお仕事の出発点に位置しているものは、『自然・労働・協同社会の理論—新しい関係論をめざして』というご著作ではないかと思います。私たちがホスピタリティの問題を検討する上で浮上してきた「近代社会の組み替えの問題」というものに対して、こうした著作を通して精力的に様々な考察をすすめておられる内山先生は、日本の中でも非常に数の少ない独創的なお仕事をされてきた方だと私は思っております。それではよろしくお願いいたします。

内山：今回はなんとも漠然としたテーマでお話してみようと思いました。ご承知の通り現代社会は近代的個人を基礎にして形成されてきましたが、その背景を最初に確認させていただければ次のようでした。近代的個人の成立は、いうまでもなく、ヨーロッパからはじまりますが、その背景には中世におけるヨーロッパ地域の力関係があったような気がします。というのは中世の時代の先進国は、イスラム側にありました。

◉近代的個人の成立の過程とその背景

通称内陸ヨーロッパというか、地中海からもっと北の方ですか、そうゆうヨーロッパ地域になってくると、今こういう言葉を使うのは問題がありますが、当時は「世界の農村」と呼ばれた辺境なのです。

私の分野で言いますと、ヨーロッパの哲学はギリシャ・ローマの哲学からはじまるということになっておりますが、じつは中世のヨーロッパ人はギリシャ・ローマ哲学を知っていたかというと、まったくその存在を知りませんでした。ではどこで知ったかというと、イベリア半島にイスラム教徒が国を作り、しばらくするとヨーロッパの優秀な人がそこに留学して、そこの優秀な人がまたバクダット大学に留学する。そのバクダット大学にギリシャの哲学が保存されており、祖先のことをイスラム側から聞いて帰ってくる、そういう歴史でもあります。また、モンゴル帝国ができて、勢力を拡張し、東ヨーロッパ地域までやってきます。その時にもイスラムからヨーロッパを開放するために決起したキリスト教徒が遠いモンゴルで大きくなり、兵力を引き連れて進んで来ていて、ヨーロッパではいつ来るかということで噂が広まりました。実際、来てみたら違っていたのですが、たぶんそういう噂が出たのは、キリスト教社会で弾圧された異端派の一部がモンゴルの勢力にいわば参謀のようなかたちで入っていたので、その辺の話が拡張されたように思われます。

そうゆうことに象徴されるように、イスラム圏という先進地に対して、ヨーロッパなど大半の地域は別に日々弾圧されていたわけではないのにどうしても頭が上がらない社会を形成していたのです。

それが逆転していくのは、大航海時代の形成あたりからです。はっきり言ってしまうと、

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

世界からの略奪が始まった頃からです。そのことで一定の富の蓄積が始まってくる。さらに、１８世紀の後半にイギリスの産業革命が始まり、いよいよヨーロッパが「我らの時代」というような気持ちをいだいていく。ここにヨーロッパ人達特有な、僕はそれはけして普遍的なものではなく、ヨーロッパ・ローカルな発想だと思っているのですが、非常に大きな喜びがありました。「我々は自由を勝ち取っている」とか「世界の中心である」とか公然と語れるようになっていく大きな喜びです。そういう雰囲気の中で近代社会が形成されるようになったのです。

僕も日本との比較対象にフランスを使ってきましたので、何度もフランスに出かけていますが、パリに行くとなかなか結構な風景が広がっています。日本は景観をむちゃくちゃにする国ですから、そういうところを少しは見習ったらどうかと思う一面、若干複雑な気持ちもあります。

ヨーロッパ人があの景観になぜこだわったのか。それはヨーロッパの栄光の原風景があるからで、あそこにしか我らのヨーロッパがないという言い方さえもできます。ですから凄まじい精神に支えられてあの景観が保全されているとも言えなくもなく、その点では手放しで「ヨーロッパは素晴らしい」と言いたくないと思っています。

今日に至るまで、つまり中世から近世的な時代を経て、近代に至る過程の中で、その過程こそが今のヨーロッパの原点であり、そこに大きな開放感と喜びがありました。その喜びの中で、歴史が進化していくという近代特有の発想を身につけます。歴史の進歩というのは実は個別の問題であって、全体の問題ではないはずなのです。ですから、車やコンピュータなどは進化したのかというと、これは間違いなく進歩しましたが、個別に進歩したわけで、それにともない失われたものや壊されてものがなかったのかというと、それは結構考えなくてはいけない問題が出てきてしまっています。だから、それは歴史全部が進歩したわけではありません。

特に現在の環境問題などが出てくると、経済は大きく発展をしたが、その陰で環境は後退をとげたと普通に認識されるようになってきました。ですから、個別に見れば進歩しましたが、近代の一つの幻想は、「歴史そのものが進歩していく」という感覚をもってしまったということです。

中世ヨーロッパを見ないと、ヨーロッパの人達がなぜあのような強い歴史の進歩感を持ったのかは理解しにくい問題かもしれません。歴史が進歩していくという観念の発生と同時にキリスト教社会では、すべてのものが合理的に解釈されるようになります。「真理は合理的なものである」というヨーロッパ特有のローカル精神が定着し、その合理性の中で真理を見つけ出し、歴史の進歩をみいだしてきたのです。その合理性というものの中に「科学」の発見という、これもまたヨーロッパ人達が期待を抱いたものがあったということです。

ですから、近代的個人が成立する過程というものの背景に二つのことが関係します。一つは、近代ヨーロッパの開放感の強さ。それは逆に言うと、中世ヨーロッパが何であった

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

のかという事でもあるわけですが。もう一つは、近代の進歩やあらゆるものが、自分たちが提起した合理主義や科学といったもので解き明かしていけると思うようになっていったこと。そしてそれを可能にしていた背景に大航海時代以来の世界からの略奪、収奪行為がありました。ですから、植民地を持つことによって、ヨーロッパ近代が成立したのです。その問題を避けて通れません。

実際、今フランスはバカンスの季節ですが、最近はひどく短縮化してきており、場合によっては日本と大差がないと思えるほど変わってきています。これは一面当然なことで、なぜバカンス制度が生まれたのかというと、植民地からの収奪があったために、本国人が余裕をもって生きることができたということに起因します。実際、パリの景色も植民地からの収奪なしでは出来えなかった景色であって、フランス人がつくったのか、植民地の人がつくったのかと言いたくなるくらいのもので、それは、ルーブル美術館であれ何であれ、すべてそういう構造から成り立っています。

ですから、海外の植民地からの収奪に支えられて、それを「豊かな社会」というべきかの議論があるかもしれませんが、近代的な豊かさをヨーロッパは手にしました。それがいわば比較的余裕のある生活をもたらし、金銭面だけでなく時間的な余裕も含み、町としてはある種の文化都市なるものを形成することもできたし、先ほどのバカンスみたいなものもつくりあげてきました。

そういうことで、人々は「我らの時代」という気持ちと、「私たちの歴史は進歩しており、その進歩の中心にヨーロッパはある」という気持ちと一対になりながら、ヨーロッパ特有の個人が形成されていくという風に考えたほうがよいでしょう。

ただ、いったん出来上がってしまうと、その結果生まれた特に経済・軍事システムは非常に強大なものがありましたから、他の国々は、いち早くヨーロッパ並になるか、それが不可能だと植民地にされるという二者択一をせまられていきます。そういう中で、ヨーロッパ・ローカルの発想が、世界の普遍になってしまうという現象を生み出していったのです。決してそれは普遍的な原理を提起したわけではなかったのだけれども、結果としてはそうであるがごとくその後の現代社会が形成されてきました。こうした屈折の中に歴史があるのではないかという気がします。

◉ロマン主義の潮流

①自然主義

ところで、今こんな言い方はしましたが、ヨーロッパの近代的市民社会はけして開放感と喜びと進歩感の中だけにあったわけではなく、１８００年頃になりますと、一部のインテリゲンチュア、教養人みたいな人達の中から「我々の歴史はこんなものだったのか」という一種の敗北感、挫折感みたいなものが出てきました。

フランス革命が１７８９年、その頃イギリスでは産業革命が起きていますから、１８００年というと近代社会の形がぼつぼつ見え始めた頃と考えればよいかと思います。その近

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

代社会は素晴らしい社会になるかと思ったら、人間がエゴイストになってひたすら自分のことしか考えなくなり、またお金にも汚くなり、非常に汚い社会が形成されていくだけのことだった。そう感じた一部の教養人達の挫折感と敗北感が、近代社会形成に対する、対抗的な思想史を形成することになります。それらを総称して私たちは「ロマン主義」や「ロマン派」という言葉を使っていますけど、それは社会主義のようにまとまった「主義」ではなく、近代社会の形成に対する「挫折感」とう共通項があるだけで、そのあとの見解は様々なものとして展開していきました。

それらを総称してロマン主義と呼ぶわけですが、実に雑多なものがそこには入っています。その中でロマン主義の大きな潮流として現れているのは、「自然主義」の傾向でした。簡単に言うならば、これは、「自然に帰ろう」という呼びかけだと考えていただければいい。イギリス・ロマン主義、ドイツ・ロマン主義、フランス・ロマン主義などが一斉に発生してまいりますが、イギリスではワーズワースなどもそうですが、美しく自然を歌い、「さあ、この自然の中に人間は入っていこう」などというものです。そのことで、本当の自分を取り戻そうという文学作品がたくさん書かれていきました。

ドイツでもゲーテの詩やハイネの詩などに反映していくわけですが、今日まで続く「自然回帰」というか「人間は自然に帰るべきだ」という流れが１８００年代初期から形成され始めていきます。今日語られている自然の問題とは内容は随分と違いますが、流れとしてはそのころから始まっていると考えてかまわない気がします。

このときの自然主義に欠陥があるとすると、それは先ほどから言っているように、教養人の挫折感というかたちで、それが「あの美しい森へ帰ろう」みたいな感じで提起されていることに象徴されている。実は、鍬を持ち土を耕してきた人たちではないわけですから、自然を非常に観念的に捉え、ひたすら美しく歌いあげていく。そこには自然と共に生きる人たちは除外されていて、ただ、自然の中を散歩する人たちが「自然に帰ろう」と語った。これは１８００年代初期の話ですので、今さら非難する必要はないのですけれども、ある種の限界があったといえるかもしれません。そのような限界はあるにしても、自然主義が、かなり大きな潮流を作ったことは確かです。

②オリエンタリズム

それからもう一つのロマン主義の潮流は「オリエンタリズム」というかたちで形成されました。我々は何でこんなむごたらしい社会を作ってしまったのかという気持ちが、ヨーロッパ的な思考にある種の限界があったのではないかという疑問を生じさせ、その回答を東洋に求めようという動きが始まりました。

例えば仏教研究がヨーロッパで始まるのはこの時代で、特に中心になったのはドイツですが、まったくわからなかった東洋の思想をよくあれだけ研究できたものだと感じるほどに必死に学ぼうとしていました。１９世紀のドイツの哲学者であるショーペンハウアーなどは後期になると「人間の本質は無である」と当然のように語るようになるし、暴力的に仏教を取りこんだニーチェみたいな人も出てきたという言い方もできます。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

③神秘主義

もう一つの動きとしては、「神秘主義」と呼んでおくのが一番良いだろうと思っていますが、神秘主義的な発想がロマン主義から出てきます。ただし神秘主義というものはけして摩訶不思議なものを重視するということではなく、合理的に説明できないことを否定しないことだと思います。ヨーロッパ合理主義に対して、合理的に説明不可能な問題が、私たちの周りにはあり、そのことを承認していくという形の思想潮流だと思えばよい。これらの三つの思想潮流はバラバラに存在したわけではなく、相互に連関性を持っていたのですが、強いて分けるとこの三つの潮流をまずみることができます。

④社会主義思想

もう一つロマン主義から出てくる潮流としては、社会主義思想があります。ところが、社会主義思想にはロマン主義系と非ロマン主義系があるのです。いま社会主義はあまり人気がなくなってしまいましたが、マルクス以降の社会主義が社会主義と呼ばれる場合が多いのですが、マルクス自身の社会主義はロマン主義ではなく近代の挫折から生まれていません。むしろ近代によって我々は獲得したものがあるということを、肯定的に捉えながら、それが資本主義という社会として形成されたために新しい矛盾をたくさん発生させたとマルクスは論じたのです。だから次の進歩として社会主義社会を創ろうとした。近代の形成も一つの進歩だし、その上にもうワンステップという形で社会主義へと向かうわけですから、近代の挫折感に根ざしているわけではありません。

しかし、当時の社会主義思想には、もっとたくさんの社会主義の潮流があって、その中には近代の挫折感を経てむしろ我々は共同体に帰ってきたいみたいなものを背後にも持ちながら、社会主義社会というものを未来に向けて展望する、かなり屈折した社会主義思想も当時はたくさんあったのです。マルクスによって、そういう社会主義思想は歴史の歯車を逆に回そうとしている反動的社会主義だと書かれたりすることになるわけですけれども。

そういうロマン主義系社会主義さえもが近代の挫折感から成立してくるということですので、実のところロマン主義というのは、現在の私たちが思想的課題にしているような問題を源流として全て提起しているといってかまわないでしょう。

「人間は自然に帰っていくべきだ」という、確かに今から見れば限界付きの提案ではあったのですけれども。ここから、今の環境問題にいたる一つの思想潮流が形成され、もう一つの「オリエンタリズム」というかたちで示された問題も、今の哲学界ですと東洋思想ブームといってもいい時代を迎えてきています。これも一つの今に至る潮流です。それから、すべてを合理で割り切っているということに関しても大変懐疑ができている時代です。これも元々はロマン主義がもたらしたものです。社会主義そのものは一時的なものなのか永久的なのかはどうかとして、現在は凋落をしたかたちですけれども、しかし、近代社会を過去を振り返りながら総括し直し、未来を展望するというロマン主義的な社会主義思想は、今日のひとつの発想形式にもなっているといっていいと思います。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ですので、全体としては、近代的個人の社会は進歩感とか解放感とかというのに支えられながら展開していくけれども、その反面でそれで良かったのかという、かなり深刻な問いかけがずうっと継続していくのも近代社会であるとも言えます。

そういうわけですから、基本的に２０世紀哲学というのは、ロマン主義の時代と乱暴に言い切ってしまってかまわないと思います。先ほどから言っている通り、ロマン主義とは近代に対する挫折派の総称に過ぎないのですから、それをロマン主義と呼ぶか呼ばないかは自由ですが、そうしたロマン主義的な思想潮流は、１９世紀以来のものを引きずりながら、２０世紀的展開を遂げていったとことではないでしょうか。

その過程で、デカルト以来の人間の本質は精神、知性にあるという発想、あるいは肉体を道具としてみていくという発想などはコテンパンにやられてしまいます。２０世紀に入ると、メルロ＝ポンティに限らず、大なり小なりそのような色彩を持ちながら、身体的な認識力や、身体が単なる道具ではなくて、身体自身が一つの認識装置として働くことにより、身体と精神をもう一度統一体として見直していくという作業が、常識的な思想的作法になっていくといってもいいかもしれません。

◉近代ヨーロッパの個人観

このような過程を経て、ヨーロッパの人が未だに苦労している「個人とは何だったのか」という問題にもう一度私たちは突き当たることになります。もともとのヨーロッパの個人感は、やはりキリスト教社会の個人感であろうという気がします。「神」と「人間」が、「神」対「個人」という関係で向き合う。その個人のあり方が伝統にあって精神的な基礎の一番重要な部分に存在していた。近代に至ると神は消失していきますが、市民社会における個人というかたちで再提示されたのが、近代ヨーロッパの個人だと思います。

僕の発想とはまるっきり違いますが、１９世紀中葉に、『死にいたる病』という本が一番良く読まれたキルケゴールという人がいました。彼からみると当時のヨーロッパの人々は「個人を確立しえない駄目な人達」というように見えていました。牧師でさえ皆群れて、村の社会で自分の安楽の場所を確保するという生き方をしていて、誰一人真の個人を確立していない、そう考えていた。だから彼は、真の個人を確立することが真のキリスト者になることであると考え、自分だけは真のキリスト者になってみせるという強い意志があって、我一人となって神の前に立とうとした。「神と結ばれた超越が人間を救い出してくれる」そのような気持ちを持っていたのですが、たぶんキルケゴールの期待した「超越」は得られなかったのではないかという気がします。彼は、３０代前半で路上に倒れて、死んでしまった。

彼の考え方に同意しているわけではないのですが、ここまで自分を徹底的に追いつめた人は僕は好きです。だから、この人に象徴されるように、実はヨーロッパ的個人というのは、キリスト教社会の中で「神」対「人」というかたちで考えられてきたものが、近代の社会原理に摩り替わり、読み直されたというかたちで成立したものです。その点では、キ

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

リスト教社会のローカルなものから発生したとまた言い直してもいいでしょう。

それが一つの近代社会システムになっていって、それを導入しながら資本主義をやっていかないと他の社会が危なくなってしまうという歴史の中で、近代の社会原理が、ある普遍原理であるがごとく振る舞ってしまうと理解したほうが正解だと思います。そうゆう面を持っているがために、ヨーロッパにおける個人観は非常に根強いのです。

◉間主観性　ー自己と他者との相互関係ー

しかし、こういう所をなんとかしなくてはならないという気持ちもまた、この２０世紀になって出てきます。そこから、非常に苦労しながら、関係をもう一度読み直す作業が進行することになった気がします。色々な人たちが色々なアプローチをしていますので、なんとも言いがたいのですが、たとえば先ほどのメルロー＝ポンティや、その前にはフッサールがいますが、彼らは「間主観性」という言葉を使うようになります。これは、例えばいま私はここに座っていますと、皆さんの様子を認識しています。だから、私が皆さんのことを認識していると僕は思っていますが、じつは皆さんが僕を認識しているもう一つの行為がここで成立しているわけです。そのことにより、僕の認識が成立しています。だから、実は僕が一方的に認識しているのではなく、皆様側から認識されているという双方向性の中で私の認識行為が成立しています。ですから、相手側からのベクトルと、こちらからのベクトルの中間かどうかはわかりませんが、ぶつかっているところ、そこにこういう認識行為が成立しているのです。間主観性というかたちで。

にもかかわらず、人間は相互のベクトルの中間で認識が成立していると思わず、「私が意識している」と思う。そこにある種の認識における精神の現象学があって、そういう把握の仕方が出てきたりします。ここにも人間は自分が個体である、個人であると思っているけれども、じつはそれはそうではなくて、ある相互の関係性の中で自分が成立しており、ところが自分の意識世界の中ではそれが消去されてしまう。その結果、「わたし」という主体が出てきます。そこに人間のある種の錯覚があるというか、錯覚に基づいて生きている人間がいるのです。

たとえば、そういう事を問題にしたり、色々なことが出てきて言えることは、結局個人というものがどういう関係性の中で成立しているのかを問い直す作業を進めていこうということだったと思っています。

「僕自身は私とは何か」「人間とは何か」というような質問をされた場合に、こんな風に考えます。たとえば、先ほど高橋先生から立教大学の何々と紹介されましたが、自己紹介をするにしても、極めて簡潔に言う場合はその部分のみを言います。しかし、それはじつは私のことをについて説明をしたことにはならないわけで、今の勤務先を紹介したにすぎません。では、私はどういう人物かと、私の中身を説明しようとすると、結構やっかいです。自分が認識している自分が正確な自分かという保証は全然なく、むしろそこにこそ大きな錯覚がある場合が多く、「私は性格のいい人間で」なんて自分で言っても全然意味がな

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

いわけです。そうすると「私」というものがどういう人物かということは説明不能ということになってしまいますが、じつは、ある一つの方法を使いますと、ある程度可能になると思います。それは、自分は今どういう関係の中で生きているかを思いつくままにたくさん並べていくという方法です。

そうすると私の場合、一つの暮らしの場所が群馬県の上野村という山村ですから、たとえば、上野村では自然とどういう関係を持ちながら生きているか、畑とどういう関係をもっているのか、村の人たちとどういう関係を結んでいるのかなどと思いつくままに自分はどういう関係で生きているのかを次々と語ります。あるいは、東京では地域社会とどういう関係をもって、自然とどういう関係をもち、仕事はどういう関係の中で行っているのかなど思いつくままに次々と積み重ねていきます。そうすると、聞いている人には、この人はたぶんこういう人なのだという中身は見えてきます。

我々はだからこそ絶対的に素晴らしい人間もいないし、絶対的にひどい人間もいないし、なぜならその関係の中にはまあまあだと言える関係もあるが、実はまずいなあと思いながら維持している関係もたくさんあります。僕などは今の市場経済のあり方には極めて批判的ですが、市場経済とちゃんと関係を結んでいるから、生きているわけです。私が批判的だからといって、自分が市場経済と無関係の人間だといったら嘘になります。他にもじつは内心まずいと思っている関係だってあります。

ですので、もしも人間が「自己変革」という言葉を使った場合、自分で考えて自分で何かを直すという意味ではなく、その関係の中でまずい部分を訂正することだと思っています。たとえば自然との関係がまずいなと思ったら、もう少し自然といい関係になるように修正する、関係を結び直す。その積み上げを「自己変革」という言葉を使うならばそうで、それが自己の主体の内部だけで出来るかのごとく考えることはできないのだと思っています。

つまり、先ほどから言ってきた通り「個人とは何だったのか」「個人と関係はどういう所にあるのか」ということを、いま我々は問い直さなければならないと思います。そうなってきた時に、ちょっと話が飛びますが、日本の伝統的な民衆思想はどんな感じの人間観を持っていたのかについて、説明させていただきます。

◉日本の伝統的な民衆思想が持っていた人間観

民俗学で柳田國男という人がいますが、彼が説いて以来、民俗学の方ではほぼ定説化していることに基づいて解説します。

まず、村があります。日本の伝統の村々に住む人々の死生観をみると、生まれて、そして生きて、死ぬということをいずれ迎えていきます。その生まれてから死ぬまでの過程を、むしろ「穢れ」というふうに考えていく。それが日本の人間観と思っていいと思います。つまり人間は生きていく過程の中で、穢れていく存在で、なぜ穢れてしまうのかというと「わたし」を持っているからです。仏教的にいうと「個我」といっていいのかもしれませ

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

ん。ともかく「わたし」を持つから、私が主張を始めるわけです。その私の主張が人間の欲とか、そういうものをもたらして、結局不要なものを蓄積したり、争い事を起こしたり、人の足を引っ張ったりします。その根源にあるのは「わたし」なるものをもっているがためにこういうことを起こしたり、穢れてしまう。こういう発想をもってかつての日本の人々は人間をみています。

死んだ時には清らかに死んで逝く人はいないわけで、その前に悟りを開けばいいのかもしれませんけれど、ほとんどの人は開けないので、大なり小なり穢れて死んで逝きます。死んだ人の魂はどこに帰っていくのかというと、じつは近くの森の中に帰ってゆきます。その森は地域により色々な考え方がありますが、すべてが同じとはいきませんが、村々としては９割方はこう考えられてきました。それは死んだ穢れた魂が、森で自然の力を借りながら、清浄へと還っていく。日本の先祖供養もこの土着信仰から出てきて、子孫が供養することによって自然力を借りて浄化する速度が速まるという発想です。そのことで早く清浄になれるというのが、日本における先祖供養のもともとの意味です。

人間は何年くらいかけて自分の魂を綺麗にするかというと、だいたい３３年という地域が多いようです。一部に５０年とか、ごく少数に１００年とかもあります。実はこれは、皮肉っぽく言えば、坊主がぱくって先祖供養の区切りとしています。仏教にはもともと先祖供養はありませんので、この辺の土着の観念と融合しながら、日本の宗教は展開していきました。

自分たちが穢れるのは「わたし」という個我があるからです。仏教の世界の言葉を借りてくるかたちで自分たちの内的世界を説明するならば、本来はさまざまなものとの間に相互性が絶えずあるだけで、「個我」をもつことは悲しいことなのです。

だから、だいたい昔の人の寿命を考えると、人間が生きていた期間くらいをかけて清浄になるわけです。清浄になってしまうと「わたし」をも主張しないわけです。ですから名前がいりません。名前があること自体「わたし」を主張しているわけです。だから、３３年くらい経つと位牌なんかも「区切りにしよう」とお寺に持っていってしまったりするでしょう。あるいは祖先全部の位牌を合体させるとか昔はよく行われていましたが、それも結局清浄になってしまうと名前がいらないからです。位牌であれ何であれ、名前がまだあるということは、まだ「わたし」を主張しているから、名前を付けているわけで、それがいらなくなるほど清浄な魂というわけで、それを集合霊という言い方をしてきました。集

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

合霊とは、ここにこのメンバーが集合しているとことではなくて、もう名前がいらないわけですから「わたし」を主張する必要もないのでまとめてみるという意味の集合霊です。この集合霊を「ご先祖様」あるいは「祖霊」といってきました。このご先祖様という言葉も明治以降は変形していて、もともとのご先祖様は村に暮らした人たちで、我が家ではないのです。我が家もその一員であって我が家だけがご先祖ではない。これは明治の近代国家の制度の中で、近代家族制度を作り直すという作業が行われたので、その過程の中で我が家になってしまいました。

それからもう一つ、江戸時代に幕府が檀家制度を使ってお寺に戸籍を置き、家系図みたいな先祖図が出来ていくというのが源流になります。江戸期にそういう方向にむかったのを明治の家制度である程度固定化させたというふうに思えばいいのかなと思います。

ご先祖様は自然と一体となった祖先ですから、イコール自然と考えてもいい。つまり完全に清浄なものは、日本の人間の発想だとこれが自然だったのです。ですから完全に清浄化してしまった魂は自然と一体化してしまっているので、自然と人間を分ける必要がありません。このご先祖様は自然と分ける必要がないほど清浄なご先祖様なわけです。ここにご先祖様が自然に帰っていく意味があるわけです。昔は亡くなって自然に帰るなんていう言葉がありましたが、まさにこうして自然に帰っていくわけです。この自然に帰り、一体化したご先祖様が色々な姿をもって時に人々の前に現れます。その現れてきたものが山の神であり、水の神、田の神でもあった。これらの神様はまったく同じ神様で、それが姿を変えたものに過ぎないというのが柳田國男の説ですが、その本体はご先祖様である。

これも柳田國男の説ですが。だから人間は死んで清浄になり、自然に帰り、そうなったがゆえにこういう姿を現すことができ、結局自分たちの暮らした村を神となって永久に守っていきます。日本の発想には地獄落ちがなく、いずれ全員こうなります。江戸期になると地獄図などが描かれて、子供を脅かしたりするかたちにはなりますが、地獄に堕ちる人間がいないという点では非常にありがたい信仰です。

こういう死生観を持つことによって、人間観が形成されます。だから人間観の生の部分だけを独立させてしまうと非常に不都合になってしまいます。死生が一体になっていて、しかも死というものが消滅ではなく、むしろ再生と考えられていたのです。再生することで清浄になって、ついには神になるという日本の神、人間が神になっていく発想、それは時には家康も神にしてしまうことも起きるわけですが、そこら中で現存した人間が神として奉られていきます。我が群馬県でも国定忠治もとうの昔に神なのですけれども。それはこういう世界を持っているから出てくる発想です。

日本の場合には、死の世界が消えてしまうと、じつは生の世界もわからない部分がでてくるというのが、ある意味で今起こっている問題というふうに考えてもいいのかという気がします。

２０世紀の有名な文化人類学者ですけど、レヴィ＝ストロース（１９０７年生まれ）が書いているのですが、人間、あるいはわたしという個人がありまして、その周りを不透明

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

なものが包んでいます。近代人たちはこの不透明なベールをすべてはぎ取ってしまって、「剥き出しのわたし」というか「裸のわたし」、それはまさに近代的個人ということになるわけですけれども、こうした孤立した個人を基礎にして、きつい社会を作ってしまいました。こうなってしまった時、人間はもはや人間ではないというようなことを彼は言っています。

この不透明なベールのかなりの部分は「自然」です。この自然は生物学とか自然科学とかが語ってくるような自然というより、私たちは自然に包まれて生きているような感覚で捉えられていく自然です。レヴィ＝ストロースもアマゾンの方に行った経験などでそれを掴んできているのでしょう。私もまた上野村に住んでいて感じているのですが、自然に包まれているというのは、自然科学の自然とはまったく違い、歴史の中で人間を絶えず包んできた自然、時には薪を提供した自然であり、山菜やきのこを提供した自然であり、人によってはおじいさんが山に木を植えた自然なのです。そういう人間との結びつきの中に見えてくる自然に包まれているのです。

ただし、人間は自然だけに包まれているわけではなく、ここに「歴史」などにも包まれている。それは年表に書かれているような歴史ではなく、たとえば上野村にいると、我々はこういう歴史の中で生きてきたのだと感じるような歴史です。自然と人間はこういう歴史を持ちながら生きてきたのだというような。それは、もしかしたら不正確な可能性もある。意地悪な学者が入って調査をすれば、そんなものは江戸の中期からであり、それは違いますなどと沢山の相違を持ち出してくるでしょう。生きられた歴史は、学者が研究対象とするような客観的な歴史記述とは異なります。その内部に入ると、我々はこういう歴史とともにここに存在しているというふうに絶えず再生してくる歴史なのです。

これも一種不透明なベールみたいなものですが、それらと同じようなものとして「文化」があります。祭りとか一つかたちを持っている場合もありますが、村の文化、暮らしの文化という時には、もっとあやふやなものを全部包み込んでいます。たとえば草鞋を作って暮らすなどというのは、昔の人であれば貧乏くさいという人が多かったのに、今はそれが村の文化として語られているわけですから、「これが我々の文化だ」みたいな感じで、自分たちの暮らしの中で絶えず見つけ出されていくものです。これも明確な客観概念とは違って、内部にいるとそれが文化として発見されるものというものもあるわけです。そして、ここにはもう一つ共同体、人間たちがこうやって生きてきたのだというような共同体生活、なんとなく助け合いの世界などを含めて、明確化できない共同体の一面があるのです。

つまり、いろんなものに包まれてわたしがいるのです。この包んでいるものは全部相互関係を持っていて、自然（ここで感じる自然といは、ああ自然と人間と歴史はこういう関係を持っているのだというのを感じるもの）・歴史が入ってくるし、そこにまた、自分たちの文化があるような、完全に分けることなく、全部相互性を持ちながら展開しています。全体としてベールのようなものに包まれながら、ここにわたしがいるというものです。それがレヴィ＝ストロース的な言い方をすると近代人はこれを全部剥がしてしまい、「わた

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

し」というものだけがボーンと存在する。あとはこれを繋ぐ社会システムだけが存在する。レヴィ＝ストロースの言うとおり、これはもはや人間ではなくなっているというまでかは分かりませんが、非常に議論しなくてはいけない問題がここに提起されています。

◉場の思想

さきほどのベールは、実はこの「場」の中にしか見えないもので、場の中にいると、我々はこのように自然に包まれながら生きているのだとか、こんな歴史に包まれながら生きているのだとか、こんな文化を持ちながら生きているのだとかを明確に感じられるのです。しかし、場を外してしまえば、そんなものはほとんど発見不能という風になってしまうのです。実はこれが「場の思想」なわけです。場があるがゆえに成り立つ思想といっていいでしょう。場があるがゆえに諒解できるのです。だから諒解とは本来ローカルなものであって、場が違えば中身が違うのです。群馬県の村と沖縄の村を一緒にしたら、これはただの爆笑行為になってしまう。群馬の中だって、冬は雪が結構降る水上などと上野村とは全然違いますし、すべて場の中にいてこそわかってくるものです。

結局、こういう世界を近代人は失っていったというか、あえてそこから自由になろうとした結果、裸の個人化になっていったのです。その時に裸の個人のままで社会全体が成り立ち得たものは、冒頭で申し上げました、近代ヨーロッパの暴力性であろうという気がします。世界を支配し収奪することによって個人の社会を創ったという問題が未だに尾を引いているわけで、今は植民地はないですが、市場経済を通して富を自国に集中させるという仕組みを失うと近代市民社会は成り立たないだろうと思っています。最近の例では投資会社のスティールがなんでブルドックソースやのこぎり会社を買収しなくてはならないのかわからないということになるわけです。別にのこぎり会社を経営したくて買収したいわけではないでしょうが、仮にあの投資行為が成立してスティールへの出資者が誰なのかしりませんが、たぶんアメリカの年金基金などにも出資しているでしょうし、あるいは個人で出資している人もいるでしょうし、その人達は成功すれば高い配当を回せることによりアメリカ的市民社会の基盤はできてくるわけです。そういうことでも示されるように、現在においても世界の格差の中でのある種の富の集中が絶えず成立するからこそ裸の個人でも生きて行ける仕組みが形成しうるのです。だから、世界中が近代市民社会のようなことになった時には、世界中が近代市民社会にならないで、格差がなくなってしまった時には成り立たなくなってしまうのです。そいう仕組みの中に我々は生きているのです。その点では、僕も頭を重くしてしまうわけですが、我々はある種の不正の上に近代社会を形成していることを認めざるを得ません。その中で生きているものはどうしたらいいのかという解決不能な問題があります。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

◉場の中の人間観

私の上野村での生活を支えているのは、私が東京でも生きている、そこで収入を得ているからなわけで、先ほどの関係ではないですが、自分だけ都合のいい関係ができているわけではないのです。かつてはこの場は人間が繰り返し死生する循環的世界だという、この「場」という中で昔の人々は人間観を形成することができました。

◉場の中の無事観

その人々が、何を理想としてきたかというと、一つは「自然、(じねん)」つまり「おのずからしかり」です。つまり日本人にとっての「じねん」は、おのずからのままに展開していく世界であり、それが清浄な世界と考えます。それに対してさっき言ったように、人間は自分を持っているのでおのずからのままに生きることができないので、わたしを主張しながらおのずからから外れていく。そういう過程のなかで人間はある種生きていく過程の中で汚れていくのです。じねんであり清浄であるものが絶えず生成してくることを一つの理想としています。人間は生きていく過程で清浄になりきれないが、いつか清浄になれることは約束されているのです。約束されているのはそこに自然があるからこそです。こういう世界が「無事」です。これが一つの願いとして出てきます。

１９７０年代に入ると、日本では自然保護という発想が出てきます。英語に訳すとなんと言ったらよいのだろうというような、日本で作られた言葉です。「自然」という言葉も明治に入ってからの訳語です。日本では自然を人間の外にある客観的対象物という発想はないですから、「じねん」として最後は一体として神になってしまうわけですから、「自然」というかたちで僕らが今使っているのは近代語といってもいいし、外来語の翻訳語といってもよく、ほぼ同じ翻訳語を二つ並べられると日本語としてはぎくしゃくします。というのも日本の人たちにとっては、自然保護ではなく、「無事」なのだという気がしています。

「無事」というのはこの世界全部。あえて言葉を分けますと、これは自然の無事、村の無事、共同体の無事、わたしあるいは我が家が全部一セットで分けられないものとして存在しています。つまりこの世界そのものが自分たちの生と死のすべての世界とし、これらはすべて分離不可能なかたちとして存在しています。こういう無事観を大事にしているはずということになります。

◉場の中の諒解という行為

結局近代になると、「自然」「村」「わたし」を全部ばらばらにしてしまい、全部を一体的に無事であるという世界観や死生観、人生観でもあるという世界を失った結果、「自然保護」というような、人間が自然を保護するという日本の発想ではありえないような発想が日本の社会でも定着しました。ただしその頃は無事の中にすべてを統一してとらえるかつての精神世界はもう壊れていました。上野村くらいだと少し残っているような気がしますけれ

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

ども、日本全体からみれば、ほぼ消えた精神世界といってもいい時代になると、「自然保護」という言葉で語らざるをえないともいえるので、けしてやめようと言っているのではありません。ただし、ここでも色々考えなくてはいけないという気はします。

場が成り立ちうる世界を持っていた頃は、無事という世界も含めてすべてが諒解されます。だから、諒解していくというのは論理を説明されて「なるほどわかりました」というのとは違い、ここにいると諒解できるものです。こうした場の思想は、違う世界に行けば通用しないわけです。そこでの諒解が、ここの世界からは諒解できないからです。

結局現代になると、この「場」を持たなくなりましたから、「諒解」していく行為ができず、結果としては「理解」せざるをえません。理解するためには議論が何らかのかたちで必要になり、論理、とかく客観的に提示された一つの体験のようなものを示されて、理解をして同意するという思考経路をたどらざるをえなくなります。もともとはこの思考経路をもつ必要がないわけですから、場の中にいれば諒解できるというかたちで物事を把握できていたので、ここにも大きな変化があったような気がします。

◉近代人に問われていること

近代人というのはこういう変動を遂げていくわけですが、今問われているのは、これでよかったのだろうかということです。じつは裸の「わたし」になった私たちは、「たしかに豊かな社会になったことは認めるけれども、何か豊かではない」その何かの中身を問われると、うまく説明できません。もともと諒解してつかんでいることを、もう一度引っ張り出すのに、その場がないわけですから、説明できません。だから時に「もっとゆったりした生き方を」とか、形骸ぐらいは言えるが、自分が言いたいことは話せないのです。結局場を失っている以上語れないし、諒解できなくなっています。こういうかたちで人間社会がこれからも存続しうるかということは一つの問いとしてはあります。

もう一つは、先ほどから言っているように、わたしが裸の状態で市民社会を形成して、ある種システマティックな社会ができていく。このかたちそのものが、世界の不均衡や格差を前提として成り立つということに、我々はどうしたらいいのだろうかという二つの課題を背負わされていて、そのことに今日の私たちは気づかされています。ですから、言葉としては「世界に貧しい人がいる。それはいけないことだ」とか、「もっと我々は援助しなくてはいけない」とかいうことに賛同しながら気持ちのどこかで、たとえば、中国が先進国になっては困るとか、少なくともももっと遅いスピードでやってもらわないと我々の基盤が壊れていくみたいなことを、どこかで感じているという精神構造です。片方でこれは不正ではないかといいながら、今の世界格差を何となく持続してもらった方がいいような気を持ちながら、自分自身も説明不能になっている精神構造がかなり多くの人にあるように思います。私たちの社会はその上に成り立っているということをうすうす知っているが、それが問題のある仕組みだということも知っているから、両方の気持ちを内心もっている状況があるような気がします。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

◉質疑応答

高橋：極めて包括的かつ体系的なお話で、我々がホスピタリティの問題の中で、様々なかたちで、やや個別的に感じていた色々な問題が一つにつながりながら、お話の中で明確に示されたと思います。とくに「場の問題」ですね。この「場」というのが先ほどの生と死のお話ではまさに循環する場であると思います。循環型の一つのモデルというものを形作っていると考えることができるのではないかと思うのですが、この「場」が失われるということは、我々が考える持続－循環型社会というのはもう不可能になってしまっているのかとか、色々考えなくてはならないところになるのですが、ご質問などございましたらお願いいたします。

では、まず私から質問させていただきます。先ほど、ロマン主義から発生した流れとして、オリエンタリズムと神秘主義と社会主義思想と三つ挙げられたのですが、神秘主義とは具体的にどんな潮流を想定されるのでしょうか。

内山：結局、神秘主義者というわけではなく、先ほどの自然主義も含めて、いろいろなところに被さっていくのだと思いますが、ショーペンハウアーなども人間の本質が無であることはわかっていると述べています。しかし、そう感じさせるわたしの意識が西洋近代の中のものなので、「わたしの意識」を自分は信じることができないような言い方をしている。

今日のレヴィ＝ストロースもこういう言い方をしますが、こういうかたちで現れてくるものは議論の余地はあるのですが、２０世紀のものも含めてロマン主義と位置づけます。２０世紀になって出てくるシュルレアリスム運動も、それをロマン主義の潮流に位置づけるかどうかは、議論してかまわない問題ですが、僕は位置づけてもよいと思っている。あの思想運動でも根本にあったのは人間の理性の否定だった。理性を介して捉えられていく世界を否定してしまえば、結局論証のできない世界をみていくことになります。これはいろいろな形で今日まで続くと私は思っていて、こういう位置づけをすると本人は不本意でしょうけれども、たとえば心理学の世界でも２０世紀にでてくるユングなどはロマン主義的な性格をもっているとみることもできます。ユングの「集合意識」は理性の世界では、何の論証もできません。だから実に面白いのだけれども、そういうものも含めて２０世紀の思想は理性的、合理的には何の論証もできないという世界に足を踏み入れることになります。そういう色々なかたちで神秘主義の潮流は、２０世紀もなお登場し続けると僕自身は位置づけるのですけれども。

高橋：今のお話で大変興味深かったのは、ロマン主義を近代の内部に生まれたもう一つの近代として捉えて、近代の内側から組み替えていく始まりに位置をする運動として考えてい

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

く。一方で同時並行的に、過去への回帰という問題も含んでいて、過去への回帰というのが単に歴史をさかのぼるという意味だけではなくて、じつは近代から次ぎのステップに向かう、回帰が先へと進もうとする運動の起点となっているという二重性というものをロマン主義はもっていたという感じがして、非常に興味深かったのですけれども、僕が神秘主義ということで考えたのは、それとも関連するシェリングだったのです。シェリングは人間が能動的に何かを作り出すのではなくて、人間も含めて、じつは人間の意識ですら自然の産出作用の延長線上にでてくるものだという考え方をしていますよね。人間の主体や意識でさえもが自然の産出という一元的なモノの中に組み込まれてしまうなどという、ヨーロッパでは珍しい考え方だと思うのですが。

内山：ドイツ哲学のもつ一つの面として、歴史をどう捉えるのかという課題がたえずあった。それを歴史哲学といってもよいのですが、シェリング自体は、歴史というものは人間が作り出していくものか、それとも何か人間を超越している大きなものに突き動かされているのかを問うている。つまり、歴史の主体は人間か、それとも人間を超越した歴史なるものかという問いだろうと思います。シェリングに超越的な意志が出てくるのは、僕自体は、カントの哲学以降の流れのなかで捉えるべきものだと思っています。カントは物事の本質を人間が捉えることができるのかどうかについて微妙なところに立っている。『実践理性批判』を読んでいると、人間は物事の本質を捉えられるとされている。ただし、捉えるためにはカントのいう理性、つまり神と結ばれた英知が必要なわけで、この理性をとおして人間のレヴェルからみれば超越的にしか捉えられない。ところが、捉えられたものを、語ろうとした場合、つまり概念的に把握しようとしたときは人間のレヴェルに戻さなければならなくなる。それはカント的言い方をすると、理性から悟性的世界に戻るわけで、その瞬間に本質は形骸化してしまう。本質ではなくなってしまうといってもよい。だから、語ることができないものとして、絶えず本質がある。神と結ばれた英知によっては捉えられるけれど、意識的世界においては捉えることができない。そのことが物自体の一つの根拠となっていくと思うのですけれども。それをカント以降のフィヒテは直感という行為が本質を捉えると考えた。シェリングも最初同じことを言っていました。

ところが、後期になると人間に直感を与える何者かに関心が出てきて、そこにある種の超越した何かをみいだすようになった。それが歴史などに重ね合わされていって人間がその歴史を作っていくのだけれども、その背後に歴史が自己展開して歴史を作っていくそういう何者かがあることをみていくといいますか、そういう考えになっていく。恐らくそれをヘーゲルは世界精神という形で語っているのです。マルクスはそこまで言っていない気がしますが、エンゲルスなんかになると史的唯物論という形で歴史法則を揺るがしえないかたちで存在させてしまいます。そのようなドイツ哲学の一つの潮流がある気がします。カントには近代への挫折が、無理にみれば少しあるのですが、フィヒテ以降になるとそういう感じは皆無になって、むしろ発展する歴史の法則を捉えようとするようになる。

仙洞田：本日私も清浄化されたような気持ちのいいお話でした。現在の状況を解決する方向

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

を見つけるというのが、ホスピタリティ研究の主題で循環型社会の一つのモデルが今のお話に出た「場」だったり、「里山」だったりするのだと思うのですが、実際今の日本においての里山の状況はどうなっているのでしょうか。

内山：今、里山論というのはかなり人気の一つなのですが、一つ前の広辞苑には「里山」という単語はなく「山里」としか記載されていません。「山里」は世阿弥なども使った言葉で、非常に古くからある言葉ですが、「里山」は１９７０年くらいに京都大学の四手井綱英先生が突然言い始めたわけで、それ以前はなかったようです。四手井さんも全国をよく歩いているのですが、やはり彼の視野に一番リアルに映っているのは、西日本あるいは京都に近い山です。

しかし、僕ら関東の人間には、四手井さんから里山と聞いて面食らったわけです。どういうことかというと、かつての人間社会は自然の力で生きている部分が非常に大きいわけです。たとえば、燃料がすべて薪ですから、このエネルギー問題は大きいのですが、実際の森林利用の形態は、利用可能な森林領域と人間領域、その関係でものすごく変わります。特に京都周辺というか、畿内地方は古代から都市が形成されていて、周辺山村でもいろいろな産業が成り立つわけです。ですから薪を切って都市に運ぶだけで生計が成り立つ。人工的に人工密集状況が作られたことによって、自然と人間の均衡状態がかなりギリギリになっていきます。里山に対しては、「奥山」という言葉が使われますが、山奥に木があってもしかたがありません。「奥山」にいくら木があっても運べなければ利用できないのです。たとえば、日本の林業地はすべて木が運べる土地に成立するわけです。木があるから林業地があるわけではなく、流通できるから林業地ができるのです。木材輸送は、昔はいかだで大きな木を運びましたから、いかだが安定的に運行できる川のある場所には林業地が形成されました。短距離ですと、なんとか牛に引っ張らせることもできますが、長距離輸送はうまく川が使えないと難しい。そうすると、山がいくらあっても、使える山はここら辺、とくに日常生活圏として、しょっちゅう薪を切ったりするのはこの山のこの辺しか使えない。ところが、ここに住んでいる人の人口は多いし、しかもこちらに大きな都市があるから運ぶことができてしまいますから、自然と人間との関係が緊迫するわけです。そこで、その部分の繰り返し利用が発生します。山から木を切って運び出すというのは実は収奪しているわけです。もちろん木自体が炭酸同化作用などしながら成長していくわけですが、それを越える山からの木の引き抜きがおこなわれてしまう。それが長期になってしまいますと、そこの土が荒れてきて、栄養分がなくなり、その結果非栄養的な土壌にしか生えない木しか生えることができなくなる。そういう状態を呈している山を四手井さんは里山と呼んでいる。それは、日常的な利用圏であり、そのことによって植生までが変わってしまう山です。

ですから、関東の人が面食らったというのは、関東に里山なんてないよということです。関東は城下町が形成されるので、そんなに大きな都市はなく、農山村地域でも人口が西日本に比べると少なく、自然があまっている状況です。ですから、同じ場所から繰り返し、

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

繰り返し木を切っているということは免れています。植生変化まで起きてしまっている里山というのは、例外的にないわけではありませんが、ほとんど存在しません。

最初、里山という言葉を聞いた時に、それは西日本独特の現象で、福岡あたりから京都、琵琶湖にかけての現象だと思いました。中国山地は製鉄の問題で違う要素がありますが、（あれは繰り返し切りましたから）そういうことを含めても、その辺りの話だと。あと、瀬戸内でも製塩業で山を繰り返し切ったという歴史があります。ところが里山が全国的な用語になってしまい、いつの間にか四手井さんが言った意味合いからも外れて、人間の近郊にあって、もともと人間と付き合ってきた山という風になってしまいました。所詮歴史用語ではないので、それでもいいとも言えますが、あまりにも地域差を無視した議論だとも思えます。

西日本に行くと、人家近くでしょっちゅう木材が運べる場所の歴史というのは、これを維持していくためにここに住む人間たちに強い規制を与えてきた歴史があります。限られた資源で多くの人口が生きていくわけですから、ポンポン木が切られてしまうと困るわけで、共同体の規制が非常に強い形で展開しました。

しかし、東日本は広いのでおおざっぱな規制しかなく、基本的には「お好きなように」に近い。だから森林の所有形態も西日本は集落の共有林になり集落規定で決められた使い方をしていくが、東日本は個人所有林のほうの面積が大きく、挙げ句の果てに戦後は共有林まで個人所有林にしました。それが良かったのか悪かったのかは別として、そのようなことをしてもかまわないくらい広いということです。村のあり方として、しっかり共有林を管理しながらある種厳しい規制を加えないと生きていきにくい地域とそうでない地域に大きな違いがある。

あと、これは東西を問わないのですが、木を運べる場所はそんなになかった。だれがこんなことを言ったのかわからないのですが、里山は昔の「薪炭林」だとよく本に書いてありますが、山に薪炭林などという山はなく、薪林と炭林は別のものです。薪は生木を下に下ろすから重いので、できるだけ家の近くがいい。僕の家も薪を使いますが、家の横で間に合っています。こういうのが一番ありがたく、切ったら下に下ろせばいい。

それに対して炭は一度焼いているので軽いわけです。昔は小学生でも５，６年になると３俵くらい背負って学校に行きながら下ろしてくるくらいですから。だから、炭は都合のいいところで焼く。それは、多くの場合は奥山になるわけです。炭は基本的に売るもので、自分の家で使うのはほんのわずかなもので、ほとんど売るわけです。ですと、できるだけ高いものを焼いた方が良い。関東であればナラの炭がいいし、紀州だとウバメガシ、ですから樹種を選んで一番高いものを焼くのがいい。炭というのはこれくらいの太さのものが一番ありがたい。だいたい１ｍ２０cm くらいに切り、それを立てて入れて焼いていく。上にも入れていきますが、問題はこういう大きな木です。これを割るのは実に労力がいるもので、くさびを使い割っていきます。今は油圧式コンプレッサーで割るという方法もありますが、炭のために薪を割るというのは実にやりたくない行為です。ですから、これくら

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

いのちょうどいいサイズの木が揃う、しかもナラやカシがある場所に窯を作ります。

ですから、薪山と炭山は違うにもかかわらず薪炭林という言い方が一般化してしまった。現場を知らない人たちが本を写し合うからこういうことになるのです。

高橋：私たちも里山という言葉をいい加減に使っていたことがよくわかりました。今のことでもやはり循環の問題がありますね。西日本をモデルにした森林の利用法には、限られた資源の中でどうやって持続を図ってゆくかの一つの知恵が現われているように思います。

内山：実は運びやすい木を薪として精力的に使うと、たとえば木の切り株から新しい芽が出てきます。これは、出やすい木と出にくい木があり、関東だと、ケヤキ、ミズナラ、コナラなどはほとんど出てきます。逆に針葉樹など出ませんが、伐採し株から新しい木を伸ばすことによって、使いやすいところに使いやすい木が出てくるのです。つまりそういう木ばっかりが残ってきます。これが大きくなって、２０年くらいすると、ちゃんとした元からある木のようになります。これは永久にやっていると駄目みたいで、５，６回やったら、それまでに種から育てたものを伸ばしておかなくてはなりませんが、少なくとも数回はこのやり方でできます。はじめは株から沢山枝がでてきますが、その出てきた枝を切って２，３本にするのが昔の「しば刈り」です。２，３本を残してまた、次を切ります。二宮金次郎が山から背負って来たものですが、柴は非常に細く、焚き付けにも非常にいいのですが、昔の利用は柴を細かく裁断して、田んぼにすき混むという農業的な利用目的で、肥料として使っているのです。あんなものではほとんどゆっくりでしか効果がないという気がするのですが、広島のほうで最近までそんなことをやっていたところがあるので、僕もむしろ土壌改良ではないかと思っていたのですが、地元の人に聞くと「いや、肥料だ」というのですね。これは、江戸期くらいまでの基本的な農業の方法で、シバはとても重要でした。だから、時には全部刈ってしまったりすると、シバが足りなくなるのです。ということで、江戸期の末期の人家近くは非常にはげ山が多かった時代があったのです。たとえば、安藤広重などの中山道の絵でも街道沿が本当にはげ山ばっかりだったわけで、広重が、省略して描いたわけではないのです。不思議なことに、明治初期と今を比べると今のほうが森林面積が広く、その一番大きな理由は、牛馬がいなくなって、草刈り場がなくなった。柴刈り場があり、そこは薪山としても利用されていたのですが、その下には草刈り場があった。本来からいうと田んぼや畑の上にはそういう場所がないといけない。ところが今はそういうものがなくなって、畑の境目まで森になっています。これは全国的になってしまったので、明治初期よりも現在は森林が多いし、戦後初期よりもやや広い。これだけ開発が進んでもそうだというのは、草刈り場がなくなっているということと、柴刈り的なことがなくなっていることから来ています。

高橋：必ずしも森林が増えたことはいいことではないのですね。

内山：僕としては草原を戻さなくては駄目だと思っていて、唱歌の「ふるさと」に「うさぎ追いしかの山」とありますが、これは森の中でやっているのではなくて、草原です。だから今うさぎはほんとうに少なくなっていて、天然記念物にしたいくらい、一年に一度くら

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

いしか見かけなくなりました。カモシカのほうが一年に１０回～２０回見かけます。薪をとる山があって田畑があり、この全体で人間がここに生きているという景観だと思っていて、薪山の部分の話だけが最近妙に言われるのはいかがなものかと・・・。もちろんこの薪を取らなくなった部分が荒れているという問題はあるのですが。

日本の場合薪を使わなくなった時期が５０年代のエネルギー革命の時で、山村過疎化というのは５０年代後半がかなりひどい。それは、炭焼きの人が一斉に山を下りたという現象が起きたからで、村でかたわらで炭を焼いている人はけっこういますが、流れてきて炭を焼くという炭焼き専用の人たちが昔はけっこういて、この人たちは、山を借りて炭を焼き、その地代として半分を置いていきます。そういうかたちの人は村に基盤をもっていないので、村から離れていきました。過疎化の問題が議論されていくのは、５０年代終わりくらいで、第一回のピークがあり、それ以降は今日的な過疎化です。今は住宅地になった近くにある、近郊の林があれているからそこを綺麗にするというかたちで里山整備がおこなわれている。それはそれでいいことですが、それと伝統的里山とは関係はありません。

さらにおなじ１９５０年代後半には、製紙業界に大きな技術革新があって、それまで針葉樹しか紙の原料に使えなかったのが、どんな木でも使えるようになりました。だから、チップ材としてどんな木でも売れることになり、その時ちょうど薪が不要になりました。また、戦後復興と戦時伐採で二重に切ったので木も足りなかった。６０年くらいに木材の輸入が自由化しましたが、外貨もあまりなく今のように外国から買ってくるわけにはいかない中で、木材価格も高く、ちょうど人工林づくりがいいように見えたのでしょう。木を切り、パルプに売ってそのあとスギとかヒノキとかのような針葉樹を植えて、じつに一挙両得のような感じで、国も積極的にこれを指導してお金を貸したり、補助金を出したりしました。

もちろん針葉樹も薪にはなりますが、良い薪ではなく、昔の生活体系の中でその違いは非常に重要でしたが、このときナラ、クヌギ、ケヤキなどの広葉樹がなくなり、そこに針葉樹が植えられました。森林そのものは歴史的産物で、今になるとなぜスギを植えたのかということになりますが、当時の状況では一挙両得として展開されました。今となっては広葉樹のほうがはるかに高価ですが、これが全部歴史的文脈なのですね。

高橋：「照葉樹林」という言葉を言ったのは、中尾佐助さんですよね。

内山：そうですね。これは学者の悪い癖といってもいいのですが、その言葉の元がどこにあるのかすぐに探ろうとしますが、日本の照葉樹林文化は東南アジアから持ち込まれたとか。そういうとそれが何かを語っているような気がしたりするのですが、むしろ森や森林文化のことは、その森があるその場のローカルな世界で語られていく文脈の方がはるかに重要だと思います。逆に言えば、元を探ることでそちらが飛んだりすると、おかしなことになる。

高津：これまでの流れで、レヴィ＝ストロースの問いから、いきなり日本に返還されたように思います。今こちらのホスピタリティで活かしている概念というのは、近代産業構造社

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

会の中における限界点をもう一回ブレークスルーする中で、何か新しい住み方などありえないかという話を伺っていて、一番最初に出てきたのがヨーロッパ・ローカルの話だったと思います。

現在の社会構造はヨーロッパが作り上げた近代産業構造が席巻をしていく中から形成されてきたわけですが、そのようなヨーロッパを反省する契機となったのが、ロマン主義であり、この中に自然主義、オリエンタリズム、神秘主義などがあり、もう一つ加えるとしたら社会主義ということになるとのお話でした。

近代社会形成の中で失望した人々が、より新たな理想図を作り上げるための変換の思想を作ろうと様々な哲学や社会思想の潮流が生じてきたわけですが、これが最後のレヴィ＝ストロースにまでいった時に、その先はどうなっていくのでしょうか。

今求められているのは、現実論として、今の社会構造を変えて行こうということだと思います。レヴィ＝ストロースの話は、あくまで哲学的命題とか、そういうところであって、近代産業構造社会の中でみじめになってしまった個というものを復活させようというところだけで捉えてしまっているのではないでしょうか。その先の社会構造全体を捉えたところで、もう一度再構築する方向に何か動きとして向いているのですか？

内山：いろいろな方がその問題で苦闘していることは確かですが、社会の大きな動きとして何か形成されているところには僕は至っていないと思います。

高橋：たとえば、ピエール・ブルデューであるとかウォーラスティンであるとか、そういう人たちが近代システムの組み替えというかたちでいろいろな議論をしています。今日内山先生のお話で、彼らの議論の中にもしかして欠落しているものがあるとすると、リアルな場の多様性をめぐる議論が欠落しているように感じました。ウォーラスティンなどは、近代世界システムの問題が浮かび上がってくるけれども、あまりにスパンが大きすぎて、ローカルな場の多様性があまり見えてきません。

内山：レヴィ＝ストロースにしても、自分自身はローカルな場で研究をしているわけですが、その部分をどこまで強調しているかというと、さほどではない気がしますね。

高津：普遍の中で語っているような気がしてしょうがない。

内山：そこがヨーロッパの人の一つの限界なのかもしれません。

高橋：ある時期からヨーロッパの人は場の思想を失っているのではないかという気がします。場のかわりにシステムとか、まさに普遍的な真理だと思いますが。

内山：つまり、「空間」と「場」とか、これの違いは人間が絶えず関わりを持っている世界であるか否かということです。歴史や文化の関わりでもいいし、個人のことがらでもいいのですが、２０世紀になって、それらが関わり合う世界を「場所」ではなく、単なる「空間（スペース）」として分け合ってしまうようになってしまいました。

こうした問題を、もう一度捉え直そうとする時、一種の場所の思想みたいなものがヨーロッパでもたくさん出てくるのですが、その場の思想を普遍化してしまう傾向にあります。本来、場の思想をやっていこうというのは、それぞれのローカル性みたいなところを対比

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

させなければいけないのですが、その辺はやはり近代を作ったヨーロッパの拭えない部分があるのでしょうね。だから、あれだけ色々なことを言いながら「普遍」が否定できないとか、「自由」という言葉を否定できないのです。

自由を否定できないのであれば違う概念で言い直さなければいけないと僕は思っていますが、彼らは、やはりヨーロッパが形成した個人に与えられた自由を否定できないのです。そこはヨーロッパ的限界と思ったほうがよいと思います。それほど近代の形成はうれしかったのでしょう。

高橋:もう一つ言うと、たぶんヨーロッパは合理性を単一なものに考えました。ローカルな場の多様性を考えれば、場はそれぞれの合理性があるわけで、合理性は複数のはずです。でもヨーロッパ思想の中では常に単一で、それは真理が単一であるということに対応するのだと思います。逆に言えば、単一の合理性とすべてを収斂させていかなければという思いがすごく強く、今日のお話の場の多様性というものも、実は合理性的なものは別の場では非合理になるのです。

高津:ヨーロッパのその辺の思想哲学の状況というのは行き詰まっているのですね。

高橋:そうですね。

内山:よくあそこまでいったものだという気持ちもありますけれど、それに答えて「このさきは任せてください」といえる東洋版もありません。

清家:柳田國男は、日本古来の場の思想が解体していった論理を詳しく語っているのですか。

内山:ないです。

清家:柳田の見出した日本古来の共同体は生と死を共有する祭祀共同体という感じがしますが、現在の山村に関してそのような死生観の厚みは解体していますか。

内山:昔のままそっくり保存しているものはないと思いますが、ある程度残している地域はあることはあります。ただいかんせん社会全体からみると多勢に無勢になっていることは間違いありません。

清家:その残された地域は、重要な存在ですね。

内山:じつは富岡製紙場を世界遺産にという話があります。経緯をお話しますと、群馬県庁でどうだろうということで、県の提案で県内の地元の人たちが討論会をしました。その時県はかなり批判されました。というのは、まず国営遺産であるということ。群馬県の歴史は、富岡製紙場は当時世界最先端の製糸技術をフランスから支配人ごと輸入してきました。一時日本の輸出額は９０％が絹糸だったので、まさに国としては大事な問題でした。群馬は養蚕県で、蚕を飼い、その後の製糸も農家がやっていました。それを「ざぐり（座繰り）製糸」といって、その状態で出荷する場合と反物にするといろいろあるわけです。

ところが富岡にもし繭を出荷するとなると、蚕農家になってしまう。製糸以後の技術をもつことによっていいものを作り売っているというのは、商売としては非常に重要なわけです。蚕農家になるということは、そうしたものが破壊されてしまうということなのです。

実際、富岡に対抗する運動が起きます。その結果、最終的には群馬産の繭は歴史的にみ

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

ても富岡には一つも入っていません。ところが、輸出用生糸でざぐりでこぶができると不都合で、細くてまっすぐな糸が望まれます。それができるようになったためにアメリカ人が絹のストッキングを履くことになったのですが。ざぐりは非常に難しい技術で、輸出をしていく場合に大量に均一なものを作らなければならない場合はなおさら難しい。

そこで最初にできたのが今の安中にある「うすい社」で、それは農民の任意的な協同組合で明治１０年ころそこに地域の農民が集まり、技術改良をしていきました。富岡工場に手作業のざぐりで対抗し始めました。それがあっという間に群馬県中に広がって一時３００社くらいできました。富岡の近くにも「かんら社」という大きいのができました。ざぐりの改良は、桑の改良、蚕の改良のほか、紡ぐ技術、道具技術の改良なども必要で、ここを職人が受け持ちました。農民・職人運動みたいな形で、反富岡運動のようなものが展開しました。群馬の近代化はその歴史でもあります。それが世界遺産であって、富岡は、単なる国家の遺産ではないということになります。

このシンポジウムで、県が「わかりました。私たちが間違っておりました」ということになったのだけれども、農民のやってきたことがどこに記録として残っているのか、どうやって世界遺産化するのかということが問題です。一応今の申請目録は富岡とその関連群にそれを入れて、記録を探し回っています。また、草津の近くに六合村（くにむら）というのがあり、その中の沢の近くに赤岩集落があって、最近村条例で景観保存地区になり、文化庁側の指定も伝統的建造物群ということでとっています。

明治１０年の大火災で村が焼けた後にできた大きな養蚕農家があり、よそと違って群馬は製糸過程を家内労働で持ち続けていたので、明治の農家はものすごく儲かっていて、大きな家と道と非常に雰囲気がいいわけです。なぜ村条例でやったのかというと、文化庁の伝統的建造物群の保存だけだと、建物の景観保全だけになってしまうので、村としてはそれをしたくない。

生きている村として文化財指定を受けたいということで、それを県がバックアップするという形をとったのです。ここはじつにいろいろなものを指定しているのですが、まず景観に山、谷、川があるのですが、その自然を指定対象にしました。このエリアがないと村が成り立たないという理由です。ここに一番見苦しい新しく立て直した家があったりして、そこはこれから村や県が財政支援をして景観だけでも直そうとしています。文化庁の指定からいうと、実はここにもっとも見苦しい、村の人が間伐材にトタンを打ち付けて作った農機具小屋や薪小屋などがあるのですが、それも全部指定しています。生きている村はこれがあって当然で、田畑も指定だし、何でこれがというものもたくさんあります。

山の入り口にお堂があります。ここが先ほどの柳田國男の話ですと、魂が帰る場所なのです。そのお堂やお墓なども指定です。村は生と死の全空間を持っていますので、まるごとでしかも現在進行形で生きています。たぶんこの六合村のやり方が正攻法だと僕は思っていています。ただ、いままで廃屋になっていた小学校（分教場）みたいな養蚕の建物だけは、動かすということになっています。一昨年クワの苗をまた５００本植えたのでそれ

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

が三年後から収穫できるそうで、それまでになんとか養蚕も再現しようとしています。この六合村の自分たちの文化財とは何か。まさにこれもローカルな六合村の人にしかわからないことです。これをどうしたらいいか、村全体を使ったグリーンツーリズムなどもありますが、ただ人を呼んでもガイドをつけないと意味はないですよね。

高橋：それは、以前私たちがフィールドワークで訪れた針江地区と似ていますね。

清家：コンテクストを共有していないとわからないのですね。

内山：来た人にいくらかお金をもらって、村の人が説明するような仕組みを作らないと。他の関連群の地域もみんなそうなのですよね。生き続けているのが文化村の姿なのだと言って見えてくるといいのですが。

高橋：そういう考え方を我々も探っていきたいと思っています。場の中の循環が、その場で生きていることは大事なことだと思います。

足立：上野村の生活と東京の生活の違いは何ですか。

内山：上野村に随分いるようになって、ここでだったら死んでもいいと思うようになりました。家は庭から山へとつながっており、そこに座っているとなんとなくそう感じられるようになりました。また、いつもおもしろいと思うのは、村に行くと畑の草刈りなど身体がすぐに動けるのですが、反対に東京での仕事に戻る時は大変です。このように身体がついていかないのをみると、上野村の生活のほうが人間の身体にあっているのではないかと思います。最初の頃、村の時間はゆっくり流れているような感じがありましたが、住んでみると次から次へやる事があります。風呂用の薪が減ってくると、そろそろ増やさなければいけないと思い、かといって薪をやめればいいのでしょうが、自分の暮らしで次々とこんなことがしたいという気分になり、追われてきます。しかも、そんな時に限って「こんばんは」と来客があり、一番早い人で２時間はかかりますから、村の生活は全然ゆっくりしていないのです。住み方にはいろいろなかたちがあり、じつに多様なのです。

足立：先生のご出身は東京と聞いておりますが、上野村の生活に昔懐かしさはないわけですね。

内山：その辺がわからない部分で、ユング流にいうと、集合的記憶みたいなものが私の奥底にあるということになりますし。

高橋：ベルクソンという哲学者が記憶には二つあって、「有意的な記憶」と「無意的な記憶」とがあって、無意的なもののほうが重要であると言っています。その無意的記憶が集合的認識のようなものかもしれないと。

内山：家に囲炉裏があり、今の学生さんたちにそれを説明するのに「一平方メートルくらいの升に灰があって」と説明しただけなのに、そこに絶えず火があり、田舎鍋を囲んで人々が座って、団らんのコミュニケーションをしているなどと連想する。それが、記憶が先なのか、言語が先なのか、言語自体が囲炉裏の概念を越えたものを語ってしまうのです。今言葉から経験がないのに「いいなあそれ」と感じ取っていく人たちが本当に多いですね。

高橋：本日はありがとうございました。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

第2回　ホスピタリティ研究会「里山は可能か」

ゲスト：東北芸術工科大学院長・東北文化研究センター所長　赤坂憲雄先生
2007年7月23日　於ハイライフ研究所

●趣旨

赤坂憲雄先生は、もともと民俗学を専攻されていましたが、山形県にある東北芸術工科大学へ赴任されたのを契機に、長く中央の地から疎外されてきた東北の歴史、風土、地域文化の研究へと進まれました。そして「東北学」と呼ばれる独自な学問分野を確立するに至ったのです。この東北学はその後の全国各地における地域学・場所学の多様な展開のさきがけとなりました。東北の地においても「盛岡学」「仙台学」「山形学」などの動きが次々に生まれています。この研究会では、そうした赤坂先生の東北学研究をふまえ、それぞれの地域やコミュニティが持つ自立した（自律した）「場所の力」の持つ意味、とくに市場的な均質化・一元化とはことなるそれぞれの場における固有で多様な生活（生産・消費・文化等々）のサイクル（循環）とその持続可能性について、東北の実例を挙げてお話しいただければと考えております。

テーマ：「里山は可能か」

高橋：本日は東北芸術工科大学教授の赤坂憲雄さんをお迎えいたしました。前回の研究会で報告していただいた内山先生は地域のそれぞれの場からの視点を大事にされていましたが、赤坂先生も、それぞれの場から社会や文化など全体の組み替えを模索なさってらしゃいます。

赤坂先生は、もともと民俗学をご専門にされていたのですが、現在、大学内にご自身が創設された東北文化研究センターを主宰され、「東北学」というこれまでになかった新しい学問分野を作られました。既存の分野を超えた新しい研究分野を創出するということは日本では特に希有なことだと思います。あえて東北というローカルな場に固執しつつ場の力をトータルな形で様々な分野から多面的に明らかにしようとなされています。私も東北出身の人間として、東北が日本の精神からすると裏の歴史といいますか、裏の面や負の面などを抱え、ずっと虐げられてきたのを強く感じますが、そうした東北という場所の持つ力に焦点を当てることによって、例えばかつての西日本が、現在ならば東京が一局中心的に作り出してきた日本の歴史を、東北という場の力を通して組み替えていくという、大胆でラディカルな構想をもった学問研究分野を自ら創始されたことは大変な意味を持っております。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

また我々のホスピタリティ研究の視点からすると、何を我々が見なくてはいけないのかは、ローカルなそれぞれの場の多様性であり、その多様性が一つの力としてどのような形で現われているかということです。現在の汎用型の市場社会に代わる形での持続可能性を孕んだ循環型社会というものの構想には、そのローカルな多様性の問題は不可欠だと思います。内山先生の話を受けて、我々が特に中心的に明らかにしようとしている持続－循環型社会に向けたモデル作りという問題に、赤坂先生のご研究は、深く関わって来るだろうと思っております。

付け加えますと、東北文化研究センターでは『東北学』という立派な季刊誌を出されています。この『東北学』から枝分かれして、今では『仙台学』『盛岡学』などの雑誌が自立的にそれぞれローカルな東北という多様性を形にしようとしている点も非常に注目されるところです。

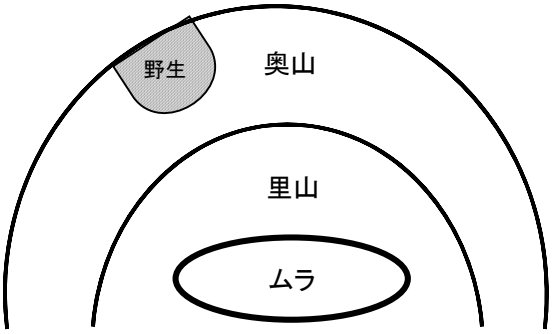
それでは赤坂先生お願いします。

赤坂：テーマは「里山は可能か」ということで、柔らかく皆さんの研究テーマにつながることができればいいな、と思っています。

◉ドイツでの見聞から

昨年の秋に何人かの研究者とドイツを訪ねました。シュヴァルツヴァルトの黒い森を見たかったのです。日本のブナの森を僕は東北でよく見ていましたが、それとどのように違うのかが以前から気になっていました。

そして、とても驚きました。なだらかな丘が続く中に、確かにこんもりとした黒い森が点在している。イメージとしては、ヘンゼルとグレーテルが捨てられた森、奥深くに魔女が住んでいて、うっそうとしたカオスを抱え込んだ闇に繋がる森を想像していましたが、あっさりと裏切られました。そういう深い森や闇はなく、こんもりとした森が丘の上に点在しているだけなのです。



かつて、ある研究会で僕はこういう図を示しました。村があり、周囲に里山があり、さらにその奥に奥山がある。里山には、日常的に薪を採る、あるいは炭を焼くための雑木林があり、その森には山菜やキノコが豊かにある。その山菜や木の実に小さな動物たちが集まり、狩猟の場にもなる。そして大きな野生動物たちが少しだけいます。いわば村の暮らしが持続可能な生態環境を作り出しているのは里山であり、奥山ではありません。里山的な自然が村の生活を支えてきた場なのです。

そんな話をドイツの研究者にしてみると、即座に返ってきた答えは、「ドイツには里山と

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

いう考えがありません」ということでした。とても面白かったです。考えてみれば、ドイツの自然は、すべてが里山なのです。すべてが里山だから、里山という空間概念を立てる必要がそもそもない。すべてはドイツの人にとって、人間がコントロールしている自然に過ぎないのです。ドイツには、野生動物はほとんどいません。日本にはまだクマがいたり、カモシカがいたり、野生がそれなりに残っている。

これは本当に大切にしなくてはいけないと思いました。つまりドイツの自然は、我々の言葉で言えばすべてが里山的自然によって覆い尽くされている。たまにスイスの方から紛れ込んでくる野生動物はいますが、そこには野生というものがないのです。

印象的だったのは、ドイツのある小さな町で、エコロジカルな運動をしている人たちでした。その町で旅館をやり、地域の食材で料理を作る。近隣の農村ですべての食材を賄うことをしている人たちの話を聞いたのですが、「牛を野生に返したいと思っている。それは、柵などで囲うのではなく、オープンスペースで牛を野生に戻す方向で飼育を行う必要があるのではないか」といっていました。彼らは本気でそんな将来図を描いているようでした。

それから、国立の動物園の近くを通りかかった時に、バッファローを野生に返す飼育をもう１５０年くらい行なっていると聞いて、関心を覚えました。このような野生の失われた状況の中で、ドイツでは飼育されてきた動物を野生状態に戻す実験を１００年、１５０年に渡ってやっているのです。

つまり、我々に引き戻して言えば、そんなことをする必要はありません。というのも奥山にそのような野生状態が残っていますし、むしろ、そこに生息する野生動物との関係がとても深刻な状況になっているのです。ドイツと我々とでは問題そのものが違うと感じました。

そして、もう一つ。ドイツの研究者に、これが原生林だという森に連れて行ってもらいました。そこは、１５０年くらい前には放牧地として使われていましたが、なにか争いごとが起こり、国家が囲い込み的に近隣の牧畜の人たちが入れないようにしたものでした。人間が人為的に手つかずの森を作り出したわけです。うっそうとした森ですが、木は倒れたままになっています。僕の目から見れば、それは原生林ではなく、人間が作り出した二次林を管理することなく放置して１５０年経った状態に過ぎません。ですから、白神山地や北東北のブナの原生林の湿った雰囲気などとは、臭いや肌触りなどが全然違うのです。

ドイツからは逆に、我々の現実がとてもよく見える気がしました。ドイツの自然生態環境というのは、もう野性的な状況はほとんど失われて、人間が管理して作る自然に覆い尽くされています。だからこそ、野生的なるものへの憧憬が大きくせり出しているのです。

それに対して、我々の自然は依然として、奥山に野生の自然を抱え込んでいるのではないか。それはたいへん新鮮な「発見」でした。つまり、欧米型のエコロジーのモデルでは捉えがたい現実＝自然に囲まれて、我々は生きているのかもしれないということです。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

◉緩衝地帯としての里山の崩壊

たとえば今、これまでには考えられなかったような状況が生まれています。ツキノワグマとの遭遇による事故が増えています。マタギの村にさえ出没し、台所を荒らし回る。サルやイノシシ、カモシカやシカなどの野生動物の農耕への害が深刻化している。いろいろと理由が論じられていますが、その根底には「里山の崩壊」があります。

里山は何よりも、人間のムラと野生の獣たちが棲む奥山とが剥き出しでぶつかることを避ける緩衝地帯でした。クマが奥山から下りてきても、里山まで来ると、空間が突然開ける。雑木林は二次林なので、木が１０年から２０年で更新されているから、視界が明るく開けている。人間たちが常に関わりながらその状態を保っている。この境界で野生動物は立ち止まる。ここが緩衝地帯になっており、その先に漂う人間の臭いに恐怖を覚えて引き返すのです。

ところが、今東北を歩いていると、その里山の崩壊が深刻な問題となっています。かつての里山がどんどん鬱蒼とした森になっている、緩衝地帯としての役割を保てなくなっているのです。今、野生動物は里山を越えてムラの縁まで来ている。畑にはトウモロコシが生えている。さらには民家に進入して何かうまいモノを探している。つまり里山が崩壊しつつあるということが、とても重要なテーマになりつつあるのです。

これはムラの問題でもありますが、なぜ里山が維持できなくなってしまったのか。経済構造が変わって薪や炭が意味をなさなくなり、雑木を切らなくなる。すると、鬱蒼とした、手入れをしていない荒れた雑木林となり、そこには茸も生えない。松茸もアカマツの林で、人間がかかわってある程度綺麗にしておかないと生えて来ないのです。山菜などの資源もとれなくなっています。

この里山が日本列島でいつ頃成立したかというと、少なくとも三内丸山遺跡の５０００年前にはすでに里山が成立していたと言われています。我々が目にしている里山の風景は、縄文時代半ばにはすでに生まれていたのです。この里山との関わりのなかで、持続的な暮らしが営まれていたのです。

縄文人は剥き出しの原生林ではなく、里山的な景観の中で暮らしていたのです。時期により変わるのですが、三内丸山の集落の中には豊かな栗林が営まれていました。そのまわりに里山的な雑木林があって、山菜や茸、燃料となる薪などが沢山採れる。その向こうには奥山が広がっている。

◉「里山」機能をもった裏の山「屋敷林」

里山に関心を持つようになったきっかけがいくつかあるのですが、その一つが屋敷林です。屋敷林というのは自分の屋敷のまわりにある防風林であり、列島の北のほう

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

は大きな木で、南の方にいくと垣根くらいの高さになります。東北新幹線で北上していくと、とりわけ仙台を越えたあたりの大崎平野が屋敷林の非常に豊かな地域となります。平野部の稲作農家の暮らしが成り立つためには、「裏の山と前の畑」が不可欠であり、これなしでは生活できない。つまり、「裏の山」が平野部の稲作農村の持続的な生活を保証しているのです。

裏の山は屋敷林を示している。屋敷林は「やま」と呼ばれることが多いですね。大崎平野あたりには鬱蒼とした広大な屋敷林があり、これが「やま」と呼ばれている。武蔵野台地でも「やま」と呼ばれていた。

宮本常一によれば、武蔵野はかつて吹きっさらしで、近世には土混じりの砂埃にやられて家の中の暮らしが成り立たなかったらしい。そこで、屋敷林を作り、茶畑を作り、玉川上水を作った。人間が自然とのかかわり方を変えることによって、ようやく武蔵野の台地で百姓が暮らせるようになったのです。

たしかに屋敷林には、そうした防風林や防砂林としての機能があります。ところが、樹種を調べてみると、実に多様なものが植えられているのです。防風林ならケヤキの木を一面に植えればいい。果物の木、杉、竹林が作られている。この屋敷林は非常に多様な樹種で作られた、多様な役割を持った林だということがわかってきました。

たとえば、杉は何十年か経ち家が建て替えられる時に建築用材として使われ、松の小枝は燃料に使われる。とりわけ、果物の木が好んで植えられていた。敷地内の湿ったところにはこれ、乾いたところにはこれと、樹種を選んで植えていました。タケノコも生えます。ケヤキは風の強い方向に植えますが、やがて大きな森になります。たんに防風林としてだけでなく、いわば里山の機能を果たしている。「裏の山」と呼ばれる背景がわかってきました。

庄内平野は一方が日本海で三方が山になっています。今は穀倉地帯として平野部に人が住んでいますが、かつては山ぎわにムラが作られていました。ムラの形態が異なっています。庄内平野のムラはみな屋敷林を持っていますが、それらは孤立していません。家に付属する屋敷林がベルト状に繋がっているのです。〇〇新田といった地名がたくさん見られます。中世の末から近世にかけて新田開発の波が起こって、それが地名として残っているのです。

近世の半ばに越後のほうから移ってきた人たちが作った、あるムラは、真ん中に八幡神社があり、家々が帯状に連なり、屋敷林もまたみごとな緑のベルトを形成しています。近世の新田開発とともに、大量の労働力と資本が集まって灌漑施設が整理され、そこに初めて人が住めるようになる。その時に越後や、庄内の山ぎわのムラに暮らしていた農民たちが誘致されて、そこに新しいムラができる。そうした平野部に展開していった近世の村の佇まいの中に、屋敷林があるのです。屋敷林とは、里山を背にして暮らしてきた人たちが、その里山の代理物としての屋敷林を背負って平野部に展開していった姿なのではないでしょうか。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

庄内平野の場合、山ぎわに中世の古い村々があり、それらは背後に里山を背負っていて、その里山とのつながりの中に村の暮らしがあった。ところが、山を離れて平野部に展開していった時、この里山的機能をどうするかという問題が生じたはずです。この里山的機能なしに百姓の暮らしは成り立たちませんから、彼らはそこに屋敷林をつくり、様々な機能を託し、平野の稲作農村の暮らしを成り立たせたのです。

山形県の大蔵村というところは、典型的な山村ですが、かつてはそこでも里山との関係の中で暮らしが営まれていました。里山を「裏の山」と呼び、里山に入ればさまざまな樹種の木があるのですが、彼らは里山に仕事に行ったついでに、そこから必要な木を家に持ち帰り植林します。家々の庭にも里山の木がどんどん移植されて、そこにも里山的景観が生まれる。この段階からすでに里山的な自然を家の庭の中に移植して作り出しているのです。山に行き何かを採ってきては庭先に植えて、小さい里山を広げていくわけです。これはほんとうに面白い。それを見ていると、庄内平野の屋敷林のルーツがわかります。生活の技術としてごく当たり前にやっていることなんですね。

◉屋敷林のデザイン

庄内の屋敷林の中には「山坪」と呼ばれる場所があり、それは一定の方位にあり、古いお稲荷さんのヤシロがあり、少し開けた特別な場所となっている。聞いてみると、かつては神様がこのあたりを守っていたということです。

僕が気になったのは、そこに生えていた木が椿とかシキミとか、なぜか照葉樹林の小さな森が作られていたことです。その中にヤシロがある。そのデザイン感覚みたいなものが面白い。特定の選ばれた照葉樹が神木として植えられ、守られてきたのです。源氏物語の「桐壺」は、桐の生えている内庭を意味します。庭の中の「山坪」「坪山」などと呼ばれる場所は、会津あたりでは、そこには神様がいて、汚してはいけないという伝承がある。いわばそこは小さな聖域なのです。そして、里山としての屋敷林の中には山坪と呼ばれる聖域があり、ヤシロがあって、神によって守られている。これもデザインですね。

◉里山はいかにして可能か

我々はいかにして持続可能な社会を築き、人と自然はどのように関わり共生していくのか、そうしたことをテーマにして共同体のモデルを模索していく時に、「里山はいかにして可能か」というテーマが非常に重要になってくると思います。

我々が聞き書きをしていて、たとえば平均年齢が８０代に近いムラがあちこちにありますが、そのムラは５年後か１０年後に訪ねたら存在していないだろうと思う。そんなムラがあちこちにあり、実際に消えて行こうとしています。

そのムラの人たちが「山が攻めてきて怖い」という。つまり、里山を維持しているときは野生を抱いた奥山がじかに押し寄せてくることはなく、里山によって堰き止められてい

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

た。ところが、里山が壊れてきた。村の入り口にある小さな畑で、サルが作物を全部食べてしまったので網を張ったが、それをあざ笑うようにサルが狙っている、とお婆さんが話してくれました。まさに剥き出しの形で奥山の自然と対峙しなくてはいけない状況が、あちこちに生まれているのです。クマ、サル、イノシシなどの野生動物がどんどん里に押し寄せてきて、悲鳴をあげているのです。

僕らも、一昨年会津の山村で「焼畑復活プロジェクト」を行なった際に、そのような体験をしました。かつては赤カブを焼畑で作っていましたが、３、４０年前から行なわれなくなっていました。連作障害に苦しんでいる赤カブの栽培を焼畑で試みたのですが、シカに食べられて失敗しました。収穫の２日ほど前にシカの群れが現われ、一番美味しいところが全部食べられてしまい、とんでもない被害をうけました。

その時、いくつかわかったことは、峠を越えた日光側でシカを保護したために、大量に繁殖して食べ物がなくなり、ミズバショウを食べながら峠を越えて、福島側に入ってきた。福島側でこの１００年見ることのなかったシカを、我々のカブが引き寄せてしまったらしいのです。２年目はシカを引き寄せたということで、焼畑はできませんでした。これも里山の崩壊の一例であり、シカだけを保護したことで生態系のバランスを崩してしまったのです。

野生が里にどんどんはみ出してくる。かつては人間たちが狩猟をして、狩猟圧が野生を堰き止める働きをしていまたした。害獣として罠をかけて捕えても、駆除という名目ですから食べもしない。野生を抱え込む自然に対して、防波堤として機能していた里山を失いながら、村がどんどん撤退していっている構図ですね。

そして、ドイツなどと全く違い、人口減少の中で野生を抱え込んだ自然が都市部にまでやがて押し寄せてくるでしょう。東京のサル、中国地方ではイノシシ、東北のクマ、ワシやタカなどが都会に進出しています。自然保護のシンボルであったものが大都会に入ってくる。とにかく日本の自然は非常に強いので、人間が堰き止めなければ進出してくるのです。

◉質疑応答

高橋：ありがとうございました。前回、内山先生から「里山」という概念を四手井綱英さんが初めて作ったと伺いました。それに加え内山先生は、関東には里山がないとおっしゃられて、西の生活文化との関わりで出てきたものではないかと指摘されていました。里山とは、薪や食材などすべて含めて、利用可能な循環可能な構造の中で、逆算されて広がりを持つようになった村の生活と関係を持っている自然であるということ

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ですね。

赤坂:たしかに東北では、里山についての議論があまり行なわれていないかもしれません。

高橋:今日のお話になられた里山の意味は、仮に西の自然環境の意味での里山でないにしてもやはりあると思います。

赤坂:里山・里海・里川という言い方は、厳密に規程する必要はとりあえずないと思いますし、そのような概念を設定することで見えてくるものがあると思います。

足立:山形にあるもう一つのご自宅で、１年のどれくらいを過ごされるのですか？

赤坂:マンションですが、最近は１年の半分くらいは山形にいて、ほかに移動していることが多いので、東京にはほとんど戻れません。

高津:やはりそれだけ外を見られると、都会との違いは見えてきますか。

赤坂:それはそうですね。

清家:ドイツは里山という考え方がないというお話でしたが、奥山がないというのがそもそもの問題なのかなと。

赤坂:そう、奥山がないから里山もないのです。

清家:日本の里山や屋敷林の山坪の話を聞いたときに、日本とドイツのコスモロジーに決定的な違いがあるのではないかと思いました。山坪のお話が象徴的でしたが、宗教学者のミルチャ・エリアーデの話からすると住居などの建築の在り方に、その文化のコスモロジーが反映されているそうです。ドイツでは奥山と野生がなくなってしまい、日本では里山が崩壊し奥山が生活圏に侵入しつつあるという具合に、両方とも持続可能性を喪失しつつあるわけです。この危機的状況が、いっそう里山的なものの存在の重要性を感じさせました。これらの問題の大本を考える際に、双方のコスモロジーにまで遡らなければならないのでしょうか。

赤坂:ドイツに行く前はむしろ、日本の自然についても人間がかかわるという側面を重視していました。つまり、手つかずの森を美しいと感じる都市の人々の意識を軽薄だと拒絶していたのです。けれども、再考の余地があるのかもしれません。

ある森林学者が行なった統計調査では、「あなたは手つかずの森を美しいと思いますか？それとも人間が関わった森が美しいと思いますか」という質問をしたところ、ドイツでは８割が人間が関わった森が美しいと答えました。それが東京では、人間が関わらない手つかずの森が美しいと答える人が圧倒的に多かったのです。地方の山形あたりになると、それが４割くらいに減り、６割の多数派は人間が関わらないと自然が荒れてしまうと考えていることがわかりました。都会派のエコロジストたちが、人間が森に入らなければ、美しい森は保たれるというメッセージを送り過ぎていることに対して、とても批判的だったのです。

ドイツでの見聞から、里山と奥山を一緒くたに議論することの限界が見えてきました。里山はたしかに人間が関わって更新してきた自然であり、人間のために作られた自然生態系です。しかし、その向こう側には、原生的な白神山地のような奥山の自然が広がってお

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

り、そこには野生の動物たちが生息している。そのような自然はあきらかに、われわれの大切な財産ですね。野生の自然をまったく喪失したドイツに触れたあとでは、東北の自然、野生のクマやカモシカがいるブナの森がすぐそこにあることは、どこか奇蹟にも似たことなのかもしれないと思うようになりました。ともあれ、里山と奥山とをきちんと分けて議論しなくてはならないと感じています。

エコロジーの人たちは、しばしば奥山の野生を抱え込む原生的な自然をモデルにして、自然の保護や保全のイメージを組み立てています。だから、人間は山に入ってはいけないと言います。しまいには里山の二次林さえ手をつけるなと飛躍してしまう。

里に近い雑木林で炭を焼いていた友人が、ぽつんと呟くんです。「炭を焼いているおれらに向かって、木を一本も切るなというだから、困ってしまうよ」と。でも、雑木林は１０年から２０年で切って更新してきたもので、今も炭焼きをやっている人たちは「俺たちは若い森を切って、炭を焼いて、森をどんどん更新する、そうして森と付き合ってきた」と言います。そこに奥山の論理を持ち込んで、１本も切るなといった時に里山は限りなく崩壊していく。これは、何を意味するか。シカやクマが村に出てくるという現実を、もう一度きちんと捉え直していかなければなりません。

そういう意味で、ある新聞記者が「山が人間を失えば、やがては人間が山を失う」といったのは象徴的です。つまり、山と関わりながら暮らす山村の人たちが消える、その時に人間は山そのものを失うのです。山村でかつて山菜やキノコなどを採って暮らしていた人たちが、今は山に人が入らない、森は鬱蒼として荒れ果ててしまい何もないと言う。このような現象は、やがて山と自然が失われるという日本人に対する警告なのかもしれません。

高橋：一応ドイツ屋として（笑）一言差し挟ませていただきます。ドイツでは一般的にせいぜい３０メートルくらいのなだらかな丘陵地帯に３０軒くらいの集落があり、混合農業をしている。連作障害による地力の低下を避ける意味もあって伝統的に放牧を含む三圃制でやってきたわけですね。また酸性雨のために今から２０年～３０年前にシュヴァルツヴァルトの森の９０％近くが失われてしまいました。おそらく現在の森はそれから再生した人為的なものです。ですからわれわれが考える自然環境とは少し違います。

一ついえることは、太古のドイツ（ゲルマン・ガリア地方）が人間の侵入を許さない鬱蒼たる針葉樹森に全土を覆われていたことです。そしてゲルマン民族の自然崇拝を異教として排除していったキリスト教の影響もあり森は悪魔や悪い霊の住む怖ろしい場所となっていきました。近世までその状況はかなり残っていてそれが『グリム童話』などに反映されています。現在のドイツの国土はそうした森を切り拓いた後にできた人為的な環境だと思います。保護されて残っている森林帯を含めドイツにはほとんど本来の意味での自然は残っていないのではないでしょうか。別の視点からいえば、ドイツにおける森と人間の関係は絶えざる「闘い」の歴史だったということです。暴威としての自然の力をはね返す闘いの末に現在の国土をつくりあげた。そこがドイツと日本の違いだと思います。日本の国土においては依然として山村部が大きな割合を占め、そうした地理的環境が日本の奥山、

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

里山などの山村構造に関わっています。そこで働いているのはドイツのような闘いの契機ではなく、共存や相互浸透の契機だと思います。

ついでにいうと、ドナウ川やライン川などドイツの川の流れは平坦で緩やかなため、昔から一番有力な輸送路として使われてきました。ところが以前内山先生のお話にもありましたが、日本の川は急なのでほとんどは輸送路として利用できない。だから自家消費の範囲の中でしか森林資源が使われなかったのだと思います。このあたりもドイツと日本の自然環境の違いにつながっていると思います。

赤坂：急流だから逆に、日本の川では雪解け水を利用して、木材でダムを作り決壊させて、下流へと押し流すといった技術があるんですね。奥山からクマのような野生動物が下りてくるのは、里山という中間領域を失ったことが、大きな原因でしょう。たんに奥山に餌がないだけではないと思います。やはり都市の論理で考えすぎているのです。欧米型の価値観の浸透や、都市的な文化の圧力を考えるべきでしょう。

山形県朝日町の志田さんという狩りをする人が、昭和４０年代にムラの前の川がどうもおかしいと思い、奥山に入ってみると、原生林が伐採されていた。それを止めるために、たった一人で裁判を起こすのです。きわめて合理主義的な人ゆえに見えるものがあったのでしょう。聞き書きをした時に、その人がサルを抱いている一枚の写真がありました。それは家のわきの小学校に現われた野生のサルで、すぐに手なづけてしまったわけです。国立公園の管理人や遭難救助隊員でもあるその人は、近隣の山を知り尽くしています。こうした人々が東北の自然をさまざまなバランスを取りつつ守ってきたのですが、かれらの退場とともに自然を守る知恵も技術もなくなってしまうはずです。

清家：私の実家の大分県の佐伯市でも、この２０年の間に次第に漁獲量が減ってきています。乱獲しすぎたのか技術が発達し過ぎたのか、その両方だと思いますが、人間と自然のバランスが崩れてきた。昔のアメリカの捕鯨がそうですが、人間の都合がいいように乱獲し、必要がなくなったら手もつけない。そして現代の極端な捕鯨反対運動へと至ってしまう。これらのバランスを欠いた技術革新や極端な発想は、自然との距離がある都会人が考え出したものでしょう。

赤坂：漁業は、技術の革新がたちまち働いて、ある意味ギャンブルのようなものだけれど、山は違う。マタギの倫理の重要性を感じますね。

高橋：山が荒れて、川が汚れて、海が磯焼けを起こし、海藻がやられる。すると魚が産卵する場所がなくなり魚の数が減る。だから魚の数を増やすためにはまずは山を回復しないと駄目だと言われていますよね。つまり、循環しながらバランスを保っていたわけですね。

赤坂：斧しか伐採技術がなくて、明治初期には豊かな山林が残されているムラがありました。山林は１００年でも持つとだれもが思っていたけれども、明治になりノコギリが入ったとたん、１０年も経たずにムラに近い森は切り尽くされてしまった。戦後のチェーンソーになると、さらに影響が大きかったといいます。

高橋：まさに持続するための技術やモラルが問題なのですね。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

赤坂：マタギの話を聞いていて印象に残っているのは、明治の初めの猟では槍が道具であり、クマとじかに対峙して仕留めていた。次に火縄銃の時代になると、クマが５メートルか１０メートルにまで近づいてから撃った。だから、今でもマタギの中には、ライフル銃で何百メートルも離れたところから撃ち殺すなんて許せないと言う人がいます。それは卑怯な振る舞いだという、獣に対してそういう感覚があるんですね。山の神の信仰も生きていて、捕獲したクマは全身を食べ尽くします。

清家：今のコンビニ的大量廃棄の感覚とは対極にありますね。

高津：近代産業構造の発展と日本的なものとの対峙を哲学的・思想的に語っていただき、その中でも里山のお話を詳しくお聞かせいただきました。今回のお話では西洋的エコロジストの考え方と日本的なものとの違いをはっきりと対比させているようでした。これらの対比から日本の問題を捉えなおすことも重要だと思いますが、今考えなくてはいけないのは、近代産業社会の中で具体的な自然をベースに置いた循環構造についての考えを、ある意味で西洋も含めた世界的なスタンダードにまで持っていかないと救われない部分があります。前回の内山先生の狩猟と農耕についてのお話では、西洋近代主義は一つの暴力の歴史であり、その中で現在の形になってきたということでした。狩猟民族の文化と農耕的な定住の文化との間には、その特徴に差異があり、考え方もまったく違う部分がありますね。日本では、たまたま地理的に農耕的なものが多く残ってきたのでしょうが、その二つの関係は考えておかなくてはならないと思いました。

赤坂：何も知らないまま、抽象的なエコロジーの呼びかけに乗っかるのではなく、目の前に転がっていることからモラルの感覚を呼び起こし、世の中の組み立て直しをしていかねばなりません。われわれ自身の現実に根ざした言葉が必要なのだと思います。

唐突ですが、民俗学者の田口洋美さんによれば、猿回しとサーカスには大きな違いがあるらしい。サーカスは鞭と飴で動物を支配しコントロールしますが、日本の猿回しには鞭も飴もなく、まったく違う思想に基づいているというのです。そこではサルとの信頼関係が基本にあるといいます。寝起きを共にしますし、野生状態から一度こちらの世界へ引きこんだ責任があるから、最後の死まで見届けます。そういう人と動物との関係なのです。なぜ鞭も飴もないのにサルが言うことを聞くのか、ということです。

足立：内山先生が群馬の里山での自分たちの生活は、自分を包み込んで守ってくれるバリアーのようなものがあり、私たちのホスピタリティの研究の根本でもある「都会での暮らしに足りないもの」との関係を感じましたが、生命の循環や人間の生と死を学ぶことができる里山がなくなりつつある今、その辺はどのようにお考えですか。

赤坂：以前内山さんとお話をしたとき、「いやあ、シンプルだなあ」と思いました。少し異質だなとも感じながら、励まされもしましたね。僕自身が山形で聞き書きした里山と繋がる暮らしの風景は、すでに３０年前くらい前に失われたものであり、山村に住んではいてもサラリーマンをやっている人が多い。村がベットタウン化してしまい、専業農家はほとんどなく、里山に関わる暮らしなどどこにもない。だからこそ、自覚的に守っていかなく

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

てはならないものがある。つまり、新しくデザインをしなくてはならないのです。牧歌的に里山を守るといっても、そのためにはまずムラで生まれ育った人たちから、知恵や技術を学び直さなくてはいけません。

高橋：里山は実に色々なものをシンボライズしていて、象徴的な存在なのだということを強く感じました。『東北学』第５号の座談会で野本寛一先生と秋道智彌先生が「民俗システム」という言葉を使っておられますが、それが行為・知識・伝承を全部ひっくるめた近代的意味でのシステムと呼べるかどうかは別として、そういうもの総体を含む一つの凝縮した全体的概念がどうやら里山というものに結びついているのと感じました。

赤坂：西日本の里山の概念を越えて、新しく作らなくてはならない「民俗システム」なのかもしれないですね。

高橋：里山という言葉に象徴されている、技術や暮らしのあり方、働き方の問題ですね。なによりもこの問題は教育の問題へと繋がっていくと思います。人の育ち方、知識や技術の伝承という問題へも繋がっていく。それをひっくるめて、今の赤坂先生のお言葉を借りれば「新しいデザイン」という言葉で表されている総体、今使われている言葉で言えば、生産や労働や消費、それらのデザインを組み替えることが必要なのかな。ですから、里山や自然を残せなどという後ろ向きなものではなく、むしろ前向きな「新しい社会デザイン運動」みたいなものの必要を感じますね。

赤坂：「森は海の恋人」という、三陸でカキの養殖をしている畠山重篤さんの話はたいへん説得力があります。まさに美しい里海が作られています。畠山さんは２０年くらい前には壊滅状態だった海を、「こんな海を子供たちに受け継がせるわけにはいかない」と覚悟を決めて、山と海との循環構造を立て直すために、子供たちとブナの植林運動を始めるのです。これは植林が本当に役に立つかというよりも、子供たちの教育が大切で、山の自然と海の自然が繋がっているということを身をもって学ぶのです。すると、子供たちは家に帰って父母に啓蒙活動をする。その輪が広がった結果が、今目の前にある美しい湾の風景やブランド化されたカキなんですね。人々の意識が変わることこそが、美しい里海を作り出しているのです。

清家：そうなると、都市に里山的・里海的なものを進入させるというか、回路が必要ですね。

赤坂：たぶんそうですね。

足立：昔おばあさんの家の庭に枇杷や南天など色々の季節の草木が植わっていて、楽しかった記憶があるのですが、それは先ほどの屋敷林と関係がありますか。

赤坂：小さな里山だったと思います。

高橋：前の畑と裏の山は基本形ですよね。

足立：北側のお手洗いの裏手に枇杷の木があったのですが。

赤坂：昔の人は、ちゃんと選んで知恵を働かせて、わかって植えていたんですね。

高橋：先ほど清家さんが言っていたコスモロジカルな発想が大切だと思います。都市の生活は何でも揃ってしまうので、それとは違う発想が必要でしょう。都市の論理の中では、民

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

俗システムが全部はぎ取られて、一人一人がむき出しの存在になって利便性だけで動いてしまいます。その民俗システムの根本にあるのが一人一人のある種のコスモロジーのようなものであろうと思います。その感覚を回復する。先ほどの子供たちのように山に入ることを通して自然の中の根源にあるコスモロジカルな感覚を取り戻していくのでしょう。そういうことの大切さを感じます。

赤坂：レヴィ＝ストロースの「狂牛病の教訓――人類が抱える肉食という病理」というエッセーが非常に面白い。カニバリズムの問題が語られていて、そのエッセーの最後に未来図が描かれている。今に肉食そのものが消えていき、狩人がいなくなる。都市は濃い自然に取り巻かれていく。我々の社会はそれを裏切りながら、ある部分ではまさにそのようになっていくでしょう。是非読んでみてください。

高橋：里山は利用可能性の技術として捉えかえさなくてはならない。ですね。もちろん　根源としての奥山の野生性というものは、全自然環境のいわば担保みたいなものとして残しておかなくてはならないのでしょうけれど、それを残した上で、里山の循環の構造の中で利用可能性な技術をもう一度考え直す必要を感じます。エコロジーの発想が問題なのは、たぶんその利用可能性そのものが自然破壊であるというふうに捉えてしまって、利用可能性の技術そのものを否定してしまっているところにあるのではないでしょうか。

赤坂：つまり、人と自然との関係というのは、開発か保護・保全かの二元論ではなく、第三極として生活や生業ということがあります。開発／保護／生業や暮らしという三極構造で考えるべきなのではないだろうか。あまりに生業や暮らしが無視されて、開発か保全・保護かという二元論に落とし込まれてきたところに不幸があったのではないだろうかと感じます。

高橋：難しいのは、その利用可能性の技術をどうやって今確保するのかという問題ですね。それは一人の漁師さんやお百姓さんだけでなく、我々一人一人が全部アクセスしていかなくてはならないと思います。

赤坂：里山そのものが流行現象としてではなくて、我々の未来社会を創造していくための場としてうまく活用していけるようになれば、随分変わると思います。

高橋：内山先生も、全部止めることはできないけれど、何十年か延命させることで手をうとうじゃないかとおっしゃっていました。本日はありがとうございました。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

第3回　ホスピタリティ研究会「生物学的視点と人間および社会」

早稲田大学　国際教養学部教授　池田清彦先生
2007年7月12日　於ハイライフ研究所

●趣旨

池田清彦先生は、日本の生物学の世界では「異端」な存在でした。それは、池田先生が生物学者でありながら、通常生物学の前提とみなされている近代自然科学的な自然観や生命に対して批判的な立場に立つからです。例えば主客二元論や要素主義などの見方を基本的に池田先生は否定されています。そして生命現象を構造化された全体性と捉える視点を提示されます。これがいわゆる池田先生の「構造主義科学論」につながるのですが、池田先生はこうした視点に立って、最近では環境問題や人間社会のあり方についても積極的に発言されています。

今回私たちは、池田先生に、

1．生命現象を「もの＝物理現象」としてのみ扱ってきた従来の生命観の問題点とは何か
2．生命現象を一個の「関係性」ないしはそうした関係性の「構造」として扱おうとする視点
3．生命における「生」と「死」の意味－「生死は非連続的におこる単体現象ではない」という視点
4．生命現象における「内」（自律性）と「外」（外部環境要因）の関係－たとえば「免疫」の問題
5．決定論と確率論のどちらかに一極的に還元できない時間（変化）を含む記述方法の可能性－生命現象を可変的な現象のレヴェルないしは不変的な形式のレヴェルのどちらかに還元しないかたちで捉えることの可能性（→これはそのまま「社会とは何か」という問題につながるのではないか。要素主義的社会観の問題）

というような問題点に立ったご報告をお願いいたしました。以下参考のためにその際池田先生に送った趣意書を引用しておきます。

『私たちは、ホスピタリティ研究を通じて社会や文化のあり方に関し、①二分法の克服の必要性－中間境界領域の重要性②＜もの＞から＜こと＞へ－関係性の視点③＜内＞と＜外＞の関係の作り直し－自律性と外部要因による変化の関係の見直し④＜垂直＞から＜傾斜＞へ－非対称性の視点⑤＜内＞と＜外＞のあいだのオープンな関係－多様性や違いに向かって開かれていること⑥それらの諸契機を含んだ形での循環にもとづく持続型のサイクル＝システム構築に向けて，等々の問題が重要なポイントになってゆくのではないかと考えるようになりました。そこから見えてくるのは、要素還元主義的な物理モデルとしての

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

システム観ではなく、有機体的な生命モデルにもとづくサイクル＝システム観が必要ではないかという視点です。

たとえば生命現象を考える時、以上のような視点、問題意識が大きく全面に出てくるのを痛感します。生命現象とは一言でいえば内なる自律性のサイクルと外からやってくる変化要因の相互関係が入れ子型に無限に重層化されていく＜内＞と＜外＞のあいだのダイナミックな運動過程なのではないでしょうか。真核細胞における細胞核とミトコンドリアに代表される細胞内小器官が互いに異なる起源を持つ生物体であり、細胞レヴェルにおいて一種の「共生」関係が成立していることは、もっとも原始的な段階における生命現象がすでに＜内＞と＜外＞の相互関係を含んでいることを示しています。と同時に＜内＞と＜外＞の関係は、分断化された二元的な関係ではなく、内に向かって一つの自立的なまとまりを形成しつつも同時に外に向かって限りなく開かれている＝変化に柔軟に対応してゆくような非二元的な関係になっていることも明らかになります。例えば免疫システムはそうした関係のあり方を示しているといえましょう。同時にアレルギー反応に見られるようにこの＜内＞と＜外＞の関係は極めて微妙なバランスの上に成り立っているため時にバランスの失調にもとづく障害を引き起こすこともあります。必要以上に清潔＝真空化された環境がアレルギーを引き起こすのは、そうした環境が＜内＞と＜外＞のあいだの緩衝帯としての中間境界領域を消滅させてしまうことによって＜内＞と＜外＞の剥き出しの衝突を招き、その結果＜外＞に対する攻撃の過剰が結果的に＜内＞の自律的なサイクル＝システムをも破壊してしまうからではないかと思われます。あるいは要素主義的に生命現象を捉え、分割された諸要素のそれぞれに起こる障害を「病」とみなすことによって、それに対し薬剤や手術による治療＝外部操作を行うことは、そこで行われる治療そのものが引き起こす＜内＞の中の自律的サイクル＝システムの変調および＜内＞と＜外＞の関係のレヴェルにおける変調にもとづいて新たな「病」を再生産するという問題も考えられます。

これらの問題はそのまま現在の社会をめぐる問題にもあてはまります。現代社会が抱える諸問題は、一言でいうならば＜内＞と＜外＞の関係を調整し、相互に損われない形で関係しあうために中間境界領域が衰退してしまった結果＜内＞と＜外＞の関係が変調してしまったことに由来するように思えます。中心部の街＝内と何の関係もない、それどころかじわじわと街＝内を衰亡へと追いやってゆく、＜内＞と本質的に無関係＝異質な、むしろがん細胞に比定すべきような郊外型の大規模商業施設などは、そのシンボルといえましょう。市場を介して野放図に＜内＞へと流入してくる＜外＞の要素としての大量画一生産品は、中間境界領域を破壊し＜内＞を解体してゆきます。循環－持続型のサイクル＝システムはその結果成り立たなくなってしまいます。私たちはもう一度＜内＞と＜外＞の関係の見直しを行ったうえで、その組み換え・作り直しという課題に取り組む必要があるのではないしょうか。』

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

テーマ:「生物学的視点と人間および社会」

高橋:池田先生はもともと生物学者でいらっしゃる訳ですが、ちょっと失礼な言い方をさせていただくと普通の意味での生物学者とは到底思えません。

池田先生は、先輩に当る柴谷篤弘先生とともに「構造主義科学論」あるいは「構造主義生物学」という考え方を早くから提唱されてまいりました。その新たな御立場から池田先生は、従来のオーソドックスな意味における生物学の方法に批判的に対峙することになりました。

その辺のことも後ほどお話が伺えると思いますが、今日、池田先生にお話をいただくことは、我々が進めている研究と深くかかわっております。

先日、中間報告の形で一応お出ししましたが、第２年度のホスピタリティ研究を進めていく中で我々が突き当ったのは、「社会あるいはコミュニティの内と外との関係」の問題であり、それが非常に重要な課題として浮かび上がってまいりました。それは、あるコミュニティが存在するとして、そのコミュニティが内部に持っている自律的なサイクルあるいは自律的なシステムを踏まえつつ、そのコミュニティにとって外から入ってくる「異質なもの」とどのようにして付き合っていくのか、という問題だと思います。

今年伺った滋賀県の琵琶湖沿いにある新旭町針江地区、あるいは京都の若狭湾に面した伊根町ですが、私が非常にはっきりした形で感じたのは、両方の町が非常にうまい形で「内と外との関係」というものを作って、「内なる自律性」というものをきちんと保証しつつ、非常に開かれた柔軟な形で、外から入ってくる多様なものに対応していたことです。そうすることによって、コミュニティの内なる自律性というものを損なわない形で、外側の「異質なもの」に対応することが可能になっていたのです。

現代の日本社会の中で起っている様々な問題は、それとは反対に「内と外」というものが剥き出しな状態で何の緩衝地帯もなくぶつかり合うために生じているように思えます。例えば、地方都市に行きますと、ご承知のように郊外型の非常に大規模な商業施設だけに人が集まり、コミュニティの真中にある商店街は、シャッター街化しています。かつての商店街は、殆んど死滅の危機に瀕しているのです。これは内と外との関係で言うと、一番まずい内と外の付き合い方じゃないかと思うんですね。そうではなくて、コミュニティの自律性というものを保証しつつ、けれども外をシャットアウトするのではなく、外から入ってくるものを柔軟に受け入れ、それと付き合っていく。そういう風な関係の作り方というものをこれから考えていくことが、非常に重要な課題になってくるはずです。そのような「コミュニティの内と外との関係」が、我々のホスピタリティ研究の非常に重要な課

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

題として浮かび上がってきたのです。

つまり、我々が今その中で生きている市場社会というものは、いわば自律したコミュニティが作り上げている「内と外との関係」と異なり、内と外が全く緩衝地帯なしに、あるいは中間領域なしにぶつかりあってしまうということなのです。具体的に我々が考えなければいけないのは、コミュニティの内の自律性を担保しつつ、外との柔軟な関係を作っていくということなのです。

それはどうしても内と外との間にある中間領域において、内なる自律性と外部に由来する異質な要素との間で生じる様々な「軋轢、矛盾、対立、ズレ」などをうまく調整し、その内と外との間に均衡的な関係を作り出す必要があるのです。

この「中間領域」には、空間的な意味だけでなく、時間系列の中での変化と言ったような問題に関しても同じことが言えます。例えば、非連続的に、ばさっばさっと変化をしていくのではなくて、緩やかな形で境界領域を経ながら、時系列における変化や進化というものが図られていくわけです。

このような「内と外との関係」や「中間領域」の問題は、生命の問題とも非常に密接に関わっています。池田先生のご著書を踏まえて言えば、生命における内と外との関係という問題が、社会的な次元における内と外との関係に非常に似通った課題を提示してくるのです。

いや、むしろ我々は、生命における「内と外との付き合い方」を学ぶことを通じて、改めて社会的な次元における「内と外との関係」を問い直し、「中間領域」というものをいかにして確保し、それに厚みを持たせていくための重要な示唆を得ようと思ったわけです。

それで本日、池田先生に生命の内と外との問題についてのお話をしていただくという趣旨でございます。では、早速、先生の方からお願いします。

池田：本日はどうもお招きいただきまして、有難うございます。私はずっと生物学をやっております。最近はなんだか環境問題にも少しばかり興味がでてまいりました。今、養老孟司氏と環境問題の本を作ろうと話をしております。

つい最近、生命関係の本を書いたのは、２００２年で、哲学書房から『生命の形式』と言う本を出版しました。もうずいぶん昔の話ですが、それが最後に書いた生命関係の本でして、今、新潮社で進化論の簡単な本を作っている最中です。そのようなことで、生物学とずうっと付き合ってきて、そこから、ちょこちょこっと余計なことをやって、色々な本を書いているのです。

けれども実際に本を書き出したのは１９８７年くらいだから、たいして経ってないのですね。その前は、ずっと虫を取っていただけなのです。ところがある時、虫取りに行って車ごと落っこって命からがら帰ってきました。「これはいつ死ぬか分らないから本を書こう」と思い至って、書きはじめたのが１９８７年だったのです。それからまあ２０年くらいたったわけです。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

今日は、最初に「科学、生物学というのは一体何を目指していたのか」という話をして、次に「生命の形式」、それから「生物と人間とのアナロジーや社会との関係」、最後に「中間領域」についての話をしようと思っております。

◉科学、生物学は一体何を目指していたのか

生物学なんて学問は、もともとあったわけではありません。「バイオロジー（生物学)」という言葉は、ラマルクか誰かが作ったのです。例えば「エコロジー（生態学)」という言葉は、ヘッケルが作りだしました。それまでは、「学問」というのはあまり分化していなかったのです。科学の起源というのは、古代ギリシャの自然哲学者たち、まあ中でも、タレスという人が「万物は水である」と言ったのが初めだったのですね。

それから色々とあるのですが、何が科学かと言いますと、まず「現象」がありますよね。物理現象や生命現象などなんでもいいのだけれども、それをどうやって理解するかということです。もっといえば、理解したものをどのようにして他人に伝えるかということですね。それで他人に伝えるためには「言葉」が要る。昔はビデオも写真もないわけですから言葉で言うしかないのです。

言葉というのは必ず「概念」が入っているわけで、概念というのは必ず何らかの「同一性」が入っているのです。ここがすごく大事なのです。つまり、同一性というものが自然の中に予め「ある」のか「ない」のか、ということがとっても大きな問題なのです。

予め自然の中に同一性が存在するのであれば、その同一性の全てを言い当てれば科学は客観的になり得るわけです。ところが、その同一性というのが、自然の側でなく、人間の頭の中に存在するとしたらどうなるでしょう。同一性というものが人間の頭のなかに存在するのは確かです。しかし、自然の中に存在するかどうかは自明ではないのです。

ここがすごく重要なところで、必ず科学というのは現在も全て「言葉」で記述します。だから『ネイチャー』でも『サイエンス』でも全部活字で書くわけですね。それで図とか表というのは、それのアペンディクスで付けるものであって、メインじゃないですね。例えば、科学の実験をしている時だって、ビデオかなんか撮ってそれを貼り付けるのは絶対に通じないわけです。必ず言葉で書きます。

言葉で書くと、名詞だったら「その名詞が、実際に何を指すか」という問題が必ず生じてきます。名詞が同じでも、その指すものがAさんとBさんで違っていたら話は通じないわけです。そういうわけで科学者共同体は、例えば「細胞」と言ったら「細胞は何を指すか」という暗黙の諒解の上に成立しているということになります。だけど実際に「細胞」というものを厳密に定義しようとすると、実はとっても難しいのです。

「生物」と皆さん言いますよね。「生物、生物学、生命」とか。しかし、実際に「生物とは何であるか厳密に定義しろ」と言われても誰にも分らないわけです。ということは、一見、言葉というものは、ある種の「同一性」を孕んで、共通了解のようなものを成立させているように見えます。しかし、実際のところ了解が成立しているふりをしている、もし

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

くは了解が成立していると思い込んでいるだけのかも知れません。そのような「言葉」というものを使用することで、我々は生きているのです。

さて、言葉によって対象を厳密に定義しようとすると、とても面倒くさいものだよということをお話いたしました。「対象が言葉によって、本当に定義可能であるか」ということは、実に大きな問題なのです。物理化学の歴史をずっと見ていると、科学者はそれが定義可能であると思って研究したわけです。しかしながら「生命」だけは定義できなかった。生命というのは物理化学現象と違うんだなあ。

物理化学現象と生命現象と二つに分けると、「生命現象」というのは、物理化学的に定義できない。そういう言い方をすると、生命現象というのはそのわけのわからないものが入ってくるので、厳密にやれば、あいまいな所がすべてなくなって、それの行き着くところは「ラプラスの魔」ですよね。

物理化学というのは二つの同一性で世界を解読しようとしたのですね。単純にいうと、一つは究極の最終実体ですね、これを昔「アトム」といったのですね。まあアトミズムというのは変な話だけれど、レウキッポスとデモクリトスの頃からあって、結構、人の頭にぴたっと嵌るような論理だったんでしょうね。近代原子論というのは、デモクリトスの話に似ているわけですよ。

究極の最終実体というわけですが、この最終実体というのは「同一性」を担保するのです。というのも時間によって変化することがないからです。不変だということです。「不変性」というのはすごく大事で、ものが不変ならそれを指す言葉が一対一対応で必ずものに当たることになるのです。

ところが最終実体が変っちゃうと何を指すか分らないですよね。「固有名」だって究極に一人の人を指すわけですが、人はどんどん変りますから、昨日の僕と今日の僕は違うわけなのです。そうなると「固有名」というのは一体何を指しているのか実は分らなくなってしまいます。

「普通名」に至っては、何を指しているのか分らないのですよ。例えば「猫」ですが、昔の人は「猫」と言う時には、先ほどの物理学のアナロジーで云えば、猫を猫たらしめる「究極の何か」があると考えたのです。それをプラトンは、「イデア」と呼んだのです。つまり、その辺に歩いている猫は、猫を猫たらしめるイデアの「影」に過ぎないのであって、猫そのものの実在は、歩いている猫という現象の背後にあるイデアだって言うのがプラトンの話でした。

だからイデア論は、物質科学に整合的だったのです。「西洋の全ての哲学はプラトン哲学への脚注に過ぎない」というのはホワイトヘッドの『過程と実在』に書いている有名な言葉なんですが、哲学だけでなく科学にも西洋の伝統を縛っているプラトニズムの影響が非常に色濃く出てるわけです。

最終実体は、普通で普遍という点でプラトンのイデアと同型です。プラトンのイデアが物質と違うのは、何もない要するに質量も大きさもないという点です。でも、普通で普遍

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

という点ではそっくりです。例えば、そのイデアが猫に取り付くと、イデアというのは猫の本質ですから、その物質はそのイデアに従って猫になるのですよ。それでイデアがなければ猫は壊れてしまうわけです。そういうことをプラトンは考えていたわけです。プラトンのイデア論は、生物の誕生と死をイデアの「憑依」と「離脱」という二つの概念で説明しようとするものでした。

それはとても良い説明ですけど、一つだけ欠点があって、イデアとは何だというのが誰も分らない。普通の人にとって、イデアとは何かといえば「霊魂」ですよね。だから死んだとしても、イデアがどこかに抜けてずっとあるという具合に、霊魂は不滅だから、死んでも心はなくならないと考えたわけです。イデア＝霊魂という特殊なものの存在によって生物と無生物を区別する考えを「生気論」と言いますが、プラトンは生気論の親玉なのです。しかしながら、イデア論的な発想は、死にそうな人の慰めにはなったけれども、近代科学にとっては殆んど役に立たない概念だった訳です。

ヨーロッパはずっとイデア論的な発想でやってきたのですが、それに対抗して一番最初に生命現象を物理化学的に矛盾しない形で説明できると言ったのはデカルトです。デカルトの主張は、「メカニズム（機械論）」と言います。今はメカニズムと言うと機械の動き方みたいなことを云うけれども、もともと機械論のことだったのですよ。だから全ての現象を物理化学的な法則で説明できるという思想のことをメカニズムと言ったのです。

それは「ヴァイタリズム」と正反対の言葉だったのですよ。今、ヴァイタリズムと言うのは、ヴァイタリテイがあるといったそういう言葉で残っていますね。メカニズムというのはヴァイタリズムの対語だったと誰も思っていないけれども、もともとはそうなんです。

ただしデカルトは「心」だけは別だとやっぱり考えていたのです。人間の心は難しいからよく分らない。それで心と機械としての身体は、松果腺で交わるとデカルトは考えたわけです。つまりデカルトはある意味では二元論なのですね。しかし、デカルトは心以外の領域を一元論的な機械論として捉えたわけです。

１７世紀に活躍したデカルトは、もともと数学者です。生物学において後に提唱される進化論的な発想は、実はずっとなかったのです。

ギリシャ哲学で一番不思議なのは、ヨーロッパの様々な科学の萌芽が全部でているんだけれども、進化論という考え方がないのです。

例外的にアリストテレスは進化のようなことを言っていますが、彼の考えは、発生プロセスの中に生物の変化を閉じ込めちゃおうということなのですね。だから、世代を継続して生物が変化するのが進化だという現在の考えとは違うのです。自然に無機物が生物になるとか、あるいはお腹の中の腐ったものが寄生虫になるとか、そういう自然発生、異種発生で別のものが発生すると考えたのです。

そのような考え方は、ずうっと残っていました。というのも寄生虫というのは、普通の人にとっては、どう考えても中から湧いたとしか見えないでしょう。蛆なんかも自然に湧いてくると皆思っていたわけです。それでこの問題を実験で確かめるにはずいぶん時間が

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

かかってしまったのです。蝿が卵を生んで蛆が湧いてくるということを実験的に確かめたのは、１７世紀のレディが最初です。それまでは、誰もが蛆は勝手に湧いてくると思っていたんだよね。変な話で「湧く」ってことと「腐る」ということが生物の繁殖の結果だということが解らなかったのです。

腐るというのは黴菌が繁殖して腐るのだけれども細菌なんてものはもっと１９世紀になってから見つかるものですから､だから、１９世紀の初頭までは細菌という考えはなかったのです。

例えば有名なファーブルは、細菌なんてよく知らなかったらしく、魚っていうのは目を覆っておけば腐らないと思っていたのですね。蝿は目に卵を生むのですよ。目が一番軟らかいからです。それ以外のところから卵から孵った幼虫が簡単には中に入れないのですよ。だから、山に行って鳥が落っこちていると、羽が生えそろっていてすごく奇麗なので死んだばっかりかと思ってぽっとひっくり返すと、蛆がいっぱいいることがあります。それは目から入ったのです。例えば山で死んだ人なんかも目から蛆が入って食べられちゃいますね。兵隊さんなんか、南洋でもって傷つくでしょう、そこに蝿が卵をうむのです。だから負傷した足の中に蛆がうごめいているものが見えたりするのです。とても痛いらしいですよ。

さて、先ほども述べましたが、不思議なことに進化論という考えかたはずうっとなかったのですね。進化論というのは本当に１８世紀くらいになってやっと萌芽が出てきた考えです。それによって発生の問題が進化と結びついて考えられるようになったのです。

その頃は色々な学説が対立しました。その一つは「プレフォーメーション・セオリー（前成説）」と「エピジュネシス（後成説）」の対立ですね。プレフォーメーションとは、単純に言うと、卵の中にちいさな人間が入っていて、それが人間になるというわけです。

一番有名な人はシャルル・ボネというスイスの生物学者で、昆虫の研究などをしました。彼は「入れ子説」という説を提唱しました。それは、卵の中にちいさな人が入っていて、その中に更にちいさな卵が入っていて、その中にまた小さな人が入っているとの主張です。それを「入れ子説」と言うのですね。

神が最初に何世代かの卵を「入れ子状態」で創っておけばそれで全部いくわけです。それで最後のいれこが発生すると、もうそれで終わりだと言うそういうふうな考え方だから、神が生物の種の寿命を決めることが出来るのです。

ボネはもっと素晴らしい事も云っている。その卵の中で生物を徐々に違った形にしておけば、進化するじゃないですか。ボネは、プレフォーメーション・セオリーの中で、生物の進化をそんな風に捉えていたと言えるのですね。

それに反対するのは「エピジェネシス（後成説）」と云って、エピジェネシスは生物というのは後から形ができるというわけですよ。後から形ができるというのは、顕微鏡がもうその頃ありましたからね。まあ顕微鏡で見ることができれば、卵の中には親のミニチュアが入っていないのは誰にもでも分るけれども。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

当時の論理的な人々の多くが、プレフォーメーション・セオリーに荷担していました。何故なら、卵の中に何かなければどうやって基本的に同じ形ができるのかが全くわからなかったのです。例えば外から環境的なバイアスがかかればどんどん変るということは誰でもわるでしょう。しかし、鶏の卵はみんな鶏になり、人間の受精卵は、事故がなければ人間になるのです。

ちょっとしたバイアスがかかって、むちゃくちゃ変わるんだったらともかく、基本的に人は蛙になったりしません。その理屈は一体何処にあるんだということを探したときに、予め何かがあると考えた方が賢いわけですよ。

その頃のプレフォーメーション・セオリーの人たちは、見えないといっても、なんらかの形で形が予め存在すると考えないと、発生の問題が分らないと言っているのですよ。見えなくても、予め存在するものはあると仮定したのです。

そのプレフォーメーション・セオリーは、結局２０世紀になってDNAとして復活してくることになる。DNAが形態を決めるという考え方は、１８世紀のプレフォーメーション・セオリーの理論家達の考えていることを原理的には反復していると言っていいでしょう。

生物学の言説において真に確定的なものは余り多くないのです。たとえば、獲得形質の遺伝は長い間否定されていましたが、最近は獲得形質が遺伝するという話に変わってきました。この変化は、ここ数年ですよ。１０年くらい前に獲得形質は遺伝するなんていうと生物学界から放逐されました。けれども、もう今は獲得形質が遺伝すると言っても、別に追放されたりはしないわけです。獲得形質は遺伝すると考えられるようになってきたのです。それはもう様変わりしましたね。

とにかく生物というのはどんどん進化するが、その理屈はよく分らない。そうなると、機械論あるいは物理化学法則だけで、物事を完璧に説明できるのかどうか実はよく分らないということになります。

けれども、僕なんかが考えるに、生物に法則がないわけじゃない。要するになんとなく決まっているわけです。そうなるとさっきの話じゃないけれども、鶏の卵が鶏になるってことも大体決まっているのですよ。

しかし、その法則を厳密に記述しようとしても上手く記述出来ない。そういう何かジレンマに陥ってしまうのです。それで、僕らは取り敢えず、普通の人に分り易いように、物理化学の法則はとりあえず実在すると考えましょうと言います。それが生物学の出発点と言ってもいいでしょう。本当のところは物理化学法則が実在するなんて思っていなかったんだけど、物理化学法則が実在しないなんて言うとややこしいからですね。

◉生命の形式

それでは、生物の法則は何かというと、物理化学の法則には矛盾しないけれども、そこから一義的に、あるいは決定論的に引き出すことができない。そういう法則が生命の中にはあるのではないか。まず、そう考えたわけです。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

その法則というのは物理化学法則から自動的に引き出せない法則なんだから、それは物理化学法則の方から見れば、ある程度「アービトラリー（恣意的)」だというわけですね。アービトラリーというのは、柴谷先生とか僕が考えた「構造主義生物学」のキーワードの一つなのです。

アービトラリーな法則があるのだけれども、そのアービトラリーな法則が一旦立ち上がると、その法則は取り敢えず生物を拘束するわけです。だから出来るまではアービトラリーなんだけれども、でたらめじゃなくて、それに従っているいろんな細胞だとか物質は皆そのアービトラリーな法則に従うんで、取り敢えずその法則でいくわけです。だから、変な話で進化の過程で鶏になるというアービトラリーの法則ができた細胞は取り敢えずみんな鶏になるわけですよ。ただそれはアービトラリーだから当然変わるわけです。

ここが大事なところです。物理化学の法則は変わらないと考えても、生物の法則というのは当然決定的な法則じゃないから変わり得る。単純にいうと、Aというアービトラリーな法則がBという別のアービトラリーの法則に変われば、そこに生物が進化するという現象が生じるのです。

ところが面倒くさい問題があって、ここからがとっても難しい。例えばアービトラリーの法則でAという法則がBという法則に変わる。そのAとBの法則を規定するメタレベルの法則があるんじゃないのかという話にどうしてもなる。ここが非常に難しいところです。

もし、Aという法則がBという法則にいきなり変わるのであるならば、この世界というのは、AがあってBがあってCがあってという具合に完全に云うと切れてしまいますよね。連続的じゃなくなるわけです。

確かに化石などを見ると連続的じゃないところがあって、グールドなんかは「断続平衡」といって、ずうっと同じような形態が続いていて、ある時に急激に別のものになるというわけですね。

自然言語で喋れば、まあ割にうまくゆくのだけれど、もっとミクロに考えて、生命は物理化学法則の上にある恣意的な法則なのだけれど、それは何をしているかというと、やっぱり物質と物質の間の関係法則に違いない。やっぱり当然その生命を構成する物質というのは、蛋白質でありアミノ酸であるわけです。それらの物質を作っているのは原子であり分子だから、それ自体が変わるわけじゃないのです。ミクロに見れば、どんなものでも連続的に変わるという話になります。結構、面倒な問題なのですね。結局、連続的に変わるにしても安定性のあるものと、不安定なものがあります。不安定なものは、しばらくすると、ある安定なところに落ちるのです。

丁度、そのように考えていた頃、一番最初の構造主義生物学のシンポジウムにルネ・トムがいらっしゃいました。大阪で柴谷さんが世界中の面白そうな人を集めてシンポジウムを開きました。ルネ・トムのカタストロフィー理論は、連続的に変化しているものがある局面を境に不連続に変わるパターンの一般法則を数学的に厳密に示したものです。それは、とってもすばらしい理論だったと思うけれど、実は余り役に立ちませんでした。だから最

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

近カタストロフィー理論についてあまり言われなくなりました。応用が効かないのです。

哲学もそうだけど、科学だって使うときは応用が効く理屈じゃないと残らないですよ。だから、面白いといっても自然言語だけで記述している科学理論とか、ただひたすら数学だけで記述する理論というものは、理論としては面白くても実際問題としては役に立たないことが多いのです。

カタストロフィー理論も生命現象に応用しようとすると上手くいかないので、今はあまり流行らないのです。カオス理論に取って代わられたみたいなところがあって、カオス理論も実際はあまり役に立たない。というのは、未来の予想が出来ないからです。確かにカオス理論は正しいかもしれないけれども、予測ができなければ実際問題としては役に立たない。

なかなか難しい問題ですが、科学は「同一性」という変わらないものに依拠していないとうまくゆかないのです。例えば、ある「同一性」があり、それが変わらないとすれば、来年も再来年も使えるということです。だから僕ら科学者が差し当って生命の中に形式とか法則というものを作ろうとすれば、やはり同一性に依拠して予測可能性を担保しようと考えます。

だけど、生命には、常に予測可能性を突き抜けた恣意性があるのです。その恣意性とは、一体何だという話ですよね。もう一つ難しいのは、法則 A が法則 B に移行するときに、それを規定しているメタ法則があるかどうかという問題ですね。

メタレヴェルの法則があるかということと、グラデュアリズム（漸進主義）は多少とも関係しているのです。法則が恣意的に変わるなどということがなければ、グラデュアリズでよいのです。僕らはある法則を厳密に決めて記述したい。だから法則が変わったら、それを記述したいのです。A から B の間は取り敢えず切れているとすると、その間を考えると、やっぱりある同一性から別の同一性に変わる契機という風なものについて考えてしまうのです。ある同一性から別の同一性への移行がネックで、ものすごく気になるところです。

本当の意味での「置換」というものがでてくるのは、やはり生物学の領域なのです。物理現象は、簡潔で法則は変わらないでしょう。物理化学の法則というのはユニバーサルで、何処にでもある。アトムだとか分子とかいうものも変わらない。だから地球の水でも火星の水でも、H_2O という形にしておけば変わらないですよ。そのように記述される同一性に対して、物理時間が働くだけです。

物理時間というのは、単に線形の時間ですから、質的な変化を含んだ本当の意味での時間かどうか実は分らない。だから科学というのは、ある意味で現象から時間を抜いてしまう話なのです。

だから科学というのは何をしているかというと、変わり行く現象を不変のコードによって記述しているのです。それが最も成功したのが、ニュートン力学です。ニュートン力学は、この世界から訳のわからぬ時間を完全に抜いて、物理時間と不変の法則と不変の実体

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

で全て説明したわけです。そうすると、例えば万有引力の法則は、月とか太陽とか地球とかの質量が一定だとすれば、それがどんな風に引き合って、どうなるかということを何万年先まで完璧に予測できるわけですよ。だから次の月食は何時とか、次の日食は何時とか、そんなこと全部分りますよね。

ただし２億年とか３億年とかは分るだろうが、極端に言って５０億年先のことは分らないかも知れない。それは質量そのものが変わって行くだろうからです。そうするとその辺は今のニュートン力学では難しいのです。例えば５０億年とすると、太陽が無くなってしまうかも知れない。

ところで生物は、さっきも言ったように恣意的な法則によって規定されています。そこでは一体何が起きているのか。生命現象にこそ本当の真なる時間があるのではないかということなのです。

そこまで考えると、実はもうちょっと恐ろしい問題が出てくる。それは、恣意的な法則があるかのように見えるというのは、おそらく記述する側にとっての問題ではないかということです。常に同じ法則があって、その法則が常に微妙に変わっているように見えるのかもしれない。そうゆう風に考えた方が、実は真理に近いかもしれない。

ところが問題は、そのような常に変わっているような法則を記述することができるのか、ということです。記述できれば、その法則自体は不変になってしまうからです。

生物というのは常に自らどんどん法則を変えていると、仮説として言うのは簡単ですよ。それがドラスティックに変わるように見えるときは、生物は進化したとか言えるわけです。しかし、それを理解するためには、何らかの同一性を捏造する他はありません。例えば日本だって、日本は法治国家だから憲法や法律があって、それを全部記述できれば日本というのはこういう風な国ですと言えるでしょう。しかし、実は法律なんか変わっても変わらなくても、日本は日本そのものなわけです。ただ日本というのはどんな国ですかと厳密に記述しようとすると極めて難しいことが生じてきます。生命現象を記述することは、それと似ているわけです。生物とは現象そのものです。その複雑な現象を記述する際のジレンマがそこに全部出てくるわけです。例えば、社会もそうです。我々は、複雑な現象の中から理解可能な同一性だけを抽出して、取り敢えずどんぶり勘定で記述をするしか本当は出来ない。

それを何処まで厳密にやるかという話だけれども、厳密にやろうとしても結局は厳密にならない。それが厳密にできると考えられたのは、物理化学という非常に単純なシステムだったからです。それだって、僕らに言わせれば、物理化学の法則がこの世界に実存しているかどうかということは実は誰も分らないのです。

本当のことを言うと原子とか分子とかは、皆同じだと思っているけれども、誰も同じだということを厳密には検証していません。だから本当に同じかどうか分りません。例えば、京都大学の理学部長をやっていた佐藤文隆という偉い物理の先生が、「本当は電子にひげが生えているのと、いないのがいるかもしれない」「皆同じと思ってどんぶり勘定でやってい

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

るんだよ」というようなことを言っていました。同じだと考えることによって、物理化学の理論と言うものが出来ています。森鴎外も同じように考えていて、「かのように」というエッセイの中で、原子というのは、かのような世界だと喝破しています。

原子を同一なものとして扱わないと物理化学の法則は上手くいかないから、そういう風に思っているだけで、本当のものではない。鴎外は、その辺がよく分っていたのです。目に見えないものは、さっきのイデアではないけど、ユニバーサルで同一のものだと思い込みやすいのです。

ライプニッツは本当に偉い科学者で哲学者でした。そのライプニッツが、全ての個物は違うということを書いていますよね。それが彼の確信でした。個物は目に見えますから、どんなに厳密に同じに作ったってどこか違うのは当たり前だけどね。だから人間は全部違うし、例えばこのコップだって規格品で作るけど、よく見ればどこか違うわけですね。そうすると、全ての個物は違うということは現在の物理化学と矛盾してしまいます。だからライプニッツの確信は誤っていたかのように見えるけれども、本当は原理的な水準では誰もその誤りを証明していないのです。

ということは「同じ」ということは、実のところ証明出来ない。「違う」ということしか我々は分らない。しかしこれとこれは違うというのも、実際は同一性を暗黙の前提として語っているわけですよね。だから話はややこしい。社会科学だってそれをやるわけですよね。特に経済学なんかはそうです。だから同一性というのは、やっぱり重要なことです。だけど同一性を厳密に定義することはできない。

僕が一番感心したのは、ハーバード大学に留学していた鶴見俊輔氏が、先ほどふれたホワイトヘッドの最終講義を聞いて、ホワイトヘッドは、ラッセルと一緒に数学の基礎づけを試みた『プリンキピア・マテマティカ』という本を書いた偉い数学者なのですが。そのホワイトヘッドが、その講義で「厳密さはフェイク（いんちき）である」と言ったそうです。厳密なもの以外を排除してきたヨーロッパの科学に対するアンチテーゼですね。

同一性が無いと、すべての科学が成り立たない。コンセプトがそもそも成り立たないから、言葉ができないですよね。猫という同一性がなければ、猫という言葉が使えない。だからとっても困るわけ。だけど猫を定義できるかどうかというとそれはできない。だから僕はしょうがなくて、「言葉は、時間を生み出す形式である」と言うわけの分らぬ言説を作ったわけです。時間を生み出す形式とは矛盾しているようだけれども、言葉という形式はその同一性によって時間を生み出しているのです。

これと関係があるかどうかはわからないのですが、郡司ペギオ幸夫という人がいます。彼は、言葉について自分自身もよく分らなくなることもあるみたいです。郡司君が「僕は怖いことがあるんですよ」と言うんです。郡司君が言うには、ものを考えていると頭の中で言葉が自動的に走り出して１時間ほど止まらないことがあるといいます。それは恐い。ずうっと止まらなかったらどうしようと思いますよ。

郡司君の例からも分かるように、自分のアイデンティティと関係なく、言葉や物が動い

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ていくみたいな経験ってあるのですね。

僕は、郡司君のような経験はないけど、昔よく寝ていて、手とか足とかが、ボアーと肥大化する経験がありました。特に熱が３９度くらいの状態で寝ていると、体がどんどん大きくなっていくのが自分でわかるのですよ。バンバンすごい勢いで大きくなるのがよくわかって、まずいなと思います。これはまずい、光速を超えるかもしれないと思って、ある時「やあっ」と宇宙の外縁を越えたと思ったのです。それで、パアッと目が醒めて「はあっ」と言って治るのです。

よく金縛りになったことがあるでしょう。金縛りになる人とならない人がいて、以前、高校生を相手に講義するときは、必ず金縛りになる人に手を挙げさせました。やっぱり金縛りになる人とならない人がいます。何時になるかと聞いたら、眠る時というのが一番多く、それと起きる時と、昼寝をする時でした。

僕は、中学校から高校の頃に金縛りに毎日なっていました。僕の場合は右手の足の親指を無理に渾身の力をかけて動かすと直るのが分っていたので、もう恐くなくなって、ずうっと金縛りを楽しんでいました。

金縛りというのは、奈落の底にすうと沈んでいくような感じの時もあるし、心臓が延々と停まっているような感じがするような時もあるし、反対に心臓が早鐘のように打つのでこのままでは壊れちゃうよと思うこともあります。

色んなことがありますが、あまり良く分らない現象でしょうね。恐らくレム睡眠と関係していると言われていますが、たぶん頭だけは起きているけれども、体が寝ている状態なのですよ。

人間の脳と体とがコンパチブルじゃなくなる時があるのです。それがどんどんひどくなった人を天才と呼ぶのではないかと思うのです。養老さんの定義によると、普通よりほんのちょっとだけ頭の壊れている人が天才と呼ばれるのだそうです。頭が壊れると補償しようと思って、脳の地図の再配置が起こる。再配線の結果、ある場所に入力が沢山入るとその部位の能力が上がって天才になるかもしれない。

サヴァンと言うのをご存知かもしれないですが、サヴァンとは普通の人に較べて、通常の意味での知能はすごく低いけれど、特殊な能力のある人のことを言います。例えば有名なサヴァンは、ナディアという小さな女の子です。この子は３才とか４才位の時から絵がものすごくうまくて、レオナルド・ダ・ビンチもびっくりするような絵を描くわけです。でも自閉症で言葉が喋れず、家庭教師が一生懸命言葉を教えたのです。それで、ある時、言葉が言えるようになったのですね。つまりコンセプトを覚えました。コンセプトを覚えたとたんに、絵がダンと下手になったのですよ。要するに、言葉を習得する以前のナディアは現象をそのまま捉えることができたが、言葉によって概念化をすることに開眼してしまい、かつての能力を失ってしまったのです。

ナディアの対極とも言える科学者というのは、概念化することの専門家なのです。概念とは何らかの同一性を作ることですよ。もちろん普通の人も必ず同一性を作りますよ。だ

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

けど芸術家というのは、概念の同一性は取り敢えず措いておいて、現象を写すことができるでしょう。普通の人は、同一性が出来上がった後にそれをやるのです。だから模写をするには、とっても訓練がいる。ところが最初から同一性がなければ簡単に模写できる。

これも変な話だけれども、フランスにラスコーの洞窟とか有名な石器時代の物凄い写実画があります。あの人たちは言葉をしゃべれなかったのではないかと言う説があります。しかし言葉をしゃべれる小学校の低学年とか幼稚園の子供の描く人というのは、あれは実は概念なのですよ。

通常の人というのは、頭の中の概念に従って描いています。人というのは手が 2 本あって足が２本あって頭があってというようなものでしょう。頭があって、こう胴体があって、足があって、手があってという具合に絵を描くんですよ。これは、実は絵じゃなくて、概念なんですね。自分の中に人とは斯くあるものという概念が存在している。だから、馬を描けと言われれば自分の中の馬という概念を描く。その概念は、実は同一性です。そういう意味で人間の同一性は､すごく早い時期から頭に刷り込まれてしまうものなのです。

それは恐らく言葉を覚えるのと似ているのかもしれない。だから猫とかそういうものは言葉なんか持っておらず、恐らく猫の中には概念は存在していないでしょう。

私が中学校に上がった時にｘ＝２が理解できなくて大分困りました。ｘ＝ｙが気に食わなかったのです。すでに小学校の時にｘはｙと違うのに同じだっていうのはペテンじゃないかと思っていました。なんで、ｘ＝２とかになるのか。変じゃないですか？ｘはｘで、２は２でしょう。もちろんｘ＝２が分らない奴は数学が出来るようになりません。もうそれは概念化ができないということです。ｘとｙが違うというのは、見れば感覚のレベルでその違いが分かります。それが同じだというのは、我々がそう思わなければならないのです。例えば白猫と黒猫だって違うわけですよ。それを同じ猫だっていうのは、こちらに何らかの枠組みがないと駄目なのだと。

だから科学と言うのは、そういう枠組みを予め組み込んじゃった後で、そこから見て向うが客観だという。そういう意味では、フェイクなことを実は言っています。

だけども、それをフェイクとは思わないのは、原子とか分子とかが実は見えないからです。昔『ミクロ決死隊』というテレビ番組？がありました。あのように人がむちゃくちゃ小さくなって見たら、多分この原子とこの原子は違うじゃないかということになって、Ａ君とかＢ君とか名前を付けるかもしれない。あるいは、もの凄くでっかい地球ほどもある宇宙人がやってきて、雀を見たら、雀は皆インヴァリアント（不変）だから、ユニバーサル（普通）だと思うかもしれない。僕らでも雀の個体差は分らないですよ。よく調べてみれば違うのは分るけれどもね。サルの研究者はサルに名前をつけていますよね。だけど僕らはサルを見たって区別はできません。

やはり観察の精度とか色んな問題があって、原子とか言うのはもう実験道具でもって検出するしか方法がない。それで、同じだと言うふうに一応見なして話を作っても、矛盾を生じない。だからそれでやっているだけですよ。実際のところ検出する道具も、原子とか

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

分子は皆同じだと言う前提のもとに作られているわけだから、バイアスがかかっているわけです。それで同じだと言っても、循環論法なのだから、実は同じだと言う証明になっていません。機械そのものはある前提の基に作られていて、その前提を基に作られた機械が前提を証明するなんてことはできないのです。

だけれども普通の人は分らないし、いちいち H_2O というのを疑っていたら大学入学試験に受からないから、取り敢えず皆深く考えずに適当にやっちゃうわけだ。それで適当にやっているうちに、適当でなくなっちゃうという。僕がいつも言うんだけど、最初は解っていても、ミイラ取りに行ってミイラにならなかった人は稀です。例えば、最初はある学問がインチキじゃないかと思っていても、学会に入ってずうっとやっていると、みんなミイラになっちゃう。私みたいに学会に行かなければミイラにならない。私は、日本生態学会に大学３年の時から入っていますが、今まで２度しか行っていない。昆虫学会も１回位しか行っていない。他人の学会に招待されて行くばっかりです。

それでは、もうちょっと話を先に進めましょう。さて、生物に恣意的なルールがあるとして、それは一体、物理化学の法則で決まらなければ、一体、何で決まるのでしょう。恣意的に決まると言ったって、勝手に決まったわけじゃあないから、何かで決まらなければしようがない。

それでクマムシの話をしましょう。クマムシは、虫じゃなくて、節足動物に近い独立の門の動物です。学名では Tardigrada、英語では water bear です。クマムシは、一番最初、記憶に間違いがなければ、フランスで屋根のところにある樋の中の塵から見つかったのです。全世界の土の中にいるので、土を持ってきて抽出するといっぱい出てきます。

ロートにストッキングで包んだ土を入れて上から電灯をつけて抽出します。熱くなって逃げ落ちてくるのを集めるのです。目の粗い昔の女の人のストッキングが一番ですね。今は、ストッキングの目が細かくなり過ぎちゃって、虫が落ちない。僕は、土壌動物の研究を山梨大学へ行ったばっかりの頃やっていて、女房や女房の妹たちによく頼んで古いストッキングを貰っていましたよ。

抽出したクマムシをカチカチに乾燥させると、徐々に縮んでいく。干乾びてカチカチになって動かなくなったのを、３日くらいほっといた後に水をたらしてやると、確かに生き返えるのだよね。クマムシは不死身であるかのようでした。

僕はそこまでやらなかったけれども、ある人はカチカチになったクマムシをね、プラス１２０度位の所に入れといた。そりゃ、水を入れたら湯だっちゃうからだめですよ。カチカチのまま、それを常温に戻してきて水をやると、生き返るのですよ。

もっとひどい友達がいて、今度はそれを液体窒素の中に放り込みましたが、それでもまだ生き返る。それじゃということで、１２０度の所に入れて、いきなり液体窒素の中に入れればさすがに死ぬだろうと思ったら、やっぱり何匹かは生き返るのだよね。

それで、クマムシというのはどうなっているのだと調べた奴がいる。１２０年位前の苔の標本の中にクマムシがついていて、どこかの博物館で、そのクマムシが生き返ったとい

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

う話があるので、１２０年位経っても生き返るのではないかと思われたこともあったけれど、どうもそれは違うみたいですが、それでも１０年は大丈夫なようです。

１０年、１５年は平気で生き返る。じゃあ、クマムシは長生きするかと言うと、しない。実際の乾燥しないクマムシは数ヶ月しか生きない。変な話だけれど、真空の中に入れたクマムシほど生き返る。酸素の中に入れると、死ぬ率が高くなる。

暇な人がいて、クマムシを酸素の中に入れて酸素濃度を調べると酸素が減るんです。だから、クマムシは呼吸して生きているじゃないかと考えました。ところが酸素が減ったのは、呼吸しているのではなくて、酸化するために使われていたのですよ。

クマムシを作っている高分子が酸化するので、酸素濃度は減るんです。酸化を起こすということは、高分子が劣化するということですから、当然死ぬ確立は高くなっていきます。真空の中にいる時は劣化しません。というのも乾燥クマムシは、実は代謝してないのです。

乾燥したクマムシは、水分含有量も１％以下、ひどい場合は０．５％位しかない。そんなの生きているわけないですよ。本当に呼吸も何にもしていない。トレハロースという固体の糖があって、調べるとクマムシは乾燥しだすとそれを出すのですね。徐々に乾燥して水を抜きながら、トレハロースを作って、そのトレハロースに高分子をくっつけていくのです。

クマムシの何が保たれているかというと、トレハロースの上にくっついている高分子の位置が保たれている。だから、分子の位置と分子の構造、まあ言ってみれば、位置関係と分子そのものの構造が保たれているのですね。

それに水をあげると、トレハロースを溶かして、それをエネルギー源にして生き返るのです。このことは何を意味しているかというと、実は「バイタリズム（生気論）」と言うのは完全に嘘で、生命と言うのは物質がある特殊な配置をとっていれば、それ自体が生命になり得るということですね。だから、僕はそのことから、「生命というのは高分子の配置のことである」という命題をどこかに書いたことがありました。これは結構、衝撃的だったですね。

じゃあ生命に特有のルールは何かというと、それは実は物質を動かすルールなのです。そういう風に考えてくると、我々の中にある色々な生物のルールというのは、物質の配置を変えるルールなのですね。

それは勿論物理化学法則・ニュートン力学とかそういうのに矛盾はしてないけれど、特殊なサイクルを作っているわけでしょう。だから生物学者はみんな知っているけれども、自分の体の中には、何とかサイクルとかいうのがいっぱいある訳ですよ。今有名なものならTCA回路だとか、光合成の回路、尿素を作る回路とか、いっぱいあります。

これはみんな細胞の中において、ある物質を次ぎの物質に変えて、また別の物質に変えて、また元に戻す。だから、大体サイクリックな系なのですね。サイクルというのは、当然、保守的だから、廻っている限りは元に戻りますから、同じことをぐるぐるやっているわけです。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

サイクルじゃないやつは、拡散しますから状態がどんどん変わります。やっぱり拡散するってことは、生きてないということです。

生きている限り廻るわけです。ただし「ちょっと変わる」と言うことは、変わっても何とかなるうちは生きています。物質の配置が生物の中のルールを生み出して、そのルールが物質の配置を作り出すのだけれども、配置とルールが循環しているうちは生物は保守的にある安定性を保って生きているわけです。ところが、ある物質の配置が、次ぎのルールを生み出さないで、物理化学の法則にのみ支配されたところに落ちたら、生物は死んでしまうということなのです。

生物が「死ぬ」ということは、単純に言うと、ある物質の配置が生物固有の恣意的なルールを生み出さなくなったということなのです。それでは、そのルールは全く別のルールを生み出して、更にそのルールが再帰的なルールであれば、それはどうなるかというと、生物が「進化する」ということなのです。

そういう風に考えると、今まではルールというものを構造主義的にスタティックに考えていたのだけれど、もうちょっとダイナミックに考えることができるかなという感じがしますよね。それであるルールが安定的な構造の配置を生みださなければ生物は死んじゃいますから、必ず生物が生きるためには安定的な配置、サイクリックな配置へと次から次へと変わっていく必要があるんです。そのサイクリックな配置の置き換えは、綱渡りみたいなものですから、どこかで崩れるのです。大概の生物は必ず死にますからね。

死なない生物もいます。単純なものは死にませんね。例えば、大腸菌などは、延々と分裂して生きていますから死なないのです。人間は必ず死にますが、死なない細胞は人間にもあります。人間の卵細胞は卵を産みだして、子孫が続く限り死にません。

女の人は子供を産みますよね。その女の子供の卵は発生してその一部は、始原生殖細胞になって卵の系列に連なり、その卵細胞からまた子供が生まれるのですよ。それで、また子供の中で始原生殖細胞ができて、その細胞の系列はずっと生きているわけですよ。

人間を構成する細胞の数は普通６０兆と言われています。３０兆と言う人も、８０兆と言う人もいる、数えた人がいるわけではないから、正確に分るわけはありませんけれどね。適当に推定するだけで、本当は何兆あるか分りません。

実験動物として使われているシー・エレガンスなんていう線虫は、細胞の数が全部分っています。オスとメスが違うとか、あるいはパターンが幾つかあってとかね。それに細胞の系列だって、全部わかっています。

卵は分裂していって、最後に１０００前後の細胞数からなる親になります。何回か分裂すると、ここは心臓、ここは何かとか、全部決まっています。細胞系列が全部同定できているわけです。

だが、人間はそうはいかない。さすがに６０兆の細胞系列を記述することはできない。

生物というのは、先ほどのクマムシの話で言ったように、「布置（コンフィギュレーション）」がルールを作って、ルールが布置を変える。その繰り返しだということです。生物学

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

者は遺伝子が我々を作っているみたいに言うけれど、そういう観点からすると遺伝子というのは、ある枠組みから見た時に世の中を単純に説明するためのものに過ぎないのかもしれません。

僕が信じている一番最近の有力な説によると、生命は蛋白質の疑似複製から始まったというものです。これは、奈良女子大にいる池原健二さんが出した仮説で「タンパク質ワールド仮説」というものですが、これは割に良いですね。

その説によると遺伝暗号というのは、一番最初にあったのではなくて、タンパク質ワールドが作り出したというんですよ。だから最初に遺伝暗号があったわけじゃなく、後からできてきたというそういう説です。

アミノ酸は比較的簡単に出来るが、アミノ酸が長くつながった蛋白質はなかなか出来ない。僕の友達の松野孝一郎氏が蛋白質を作る実験をしたんですよ。

それはどういう実験かというと、生物がどこで発生したかという問題に関係しています。生物は、恐らく海底のブラックスモーカー、いわゆる「ハイドロサーマルベント（hydrothermal vent）」、日本語で「熱水噴出孔」というところで発生したらしいのです。

生命には遺伝子（DNA）と蛋白質が不可欠です。蛋白質はどうやって作るのかというと、今、蛋白質は遺伝子が作ります。しかし遺伝子が機能するためには、たとえば遺伝子を複製したりするためには蛋白質がいるから、生命の起源の問題は鶏が先か卵が先かという話になります。

RNA というのは自分が触媒作用を起こしますから、RNA は自分で自分を複製できるんです。だから最初に RNA ワールドがあったのだろうと言われてきました。

しかし、蛋白質というのは本当に DNA がないと出来ないのかということで、実験しようとしたのが松野さんです。

松野さんの説によると、アミノ酸というのはエネルギー準位が高いので、高エネルギー、即ち高温のところではくっ付く。アミノ酸は、高温の中でくっ付くのだけれど、高温は更にそれを「切る」という役割もするのです。だから高温のままだとアミノ酸の鎖は長く伸びない。

そこで、熱水噴出孔に着目したのです。海の底というのは、冷たいでしょう。大体４度位しかない。そこに１２０度の熱湯が噴き出ると熱い所と冷たい所がモザイク状になる。熱いところに入った時に、アミノ酸が連鎖して、それが冷たい所に出てちょっと固定されて安定して、しばらくしてまた熱い所に入ると、またそこでくっ付きます。そういうことを繰り返していれば、長くなるのでないかという風に松野さんは思った。

思っただけでは誰も信用しないから、それで実験しようとしたんです。大きなタンクを作り、むちゃくちゃに冷えた水を入れて、その下に穴を開けてモザイク上の大きなヒーターで底から熱を加えたわけです。その中にグリシンという一番単純なアミノ酸を放り込んで、グリシンが重合するかどうか調べた。結果は見事にポリブシンができました。

アミノ酸で一番簡単なのは、グリシンです。あと簡単なのはアラニンやアスパラギン酸も

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

わりに簡単です。それから、バリンというのがあるでしょう。その４つのアミノ酸があって、それぞれの性質はまったく違っています。

そのまったく性質の違うアミノ酸というのは、くっ付いて長い鎖を作った時に色々なタイプの機能をもつ蛋白質が出来ます。だから、その４つのアミノ酸だけで蛋白質を作らせてみると、中には擬似複製もするものが出来ることがわかりました。

擬似複製というのは、蛋白質が自ら触媒になって、自分と似たようなものを作る。その重要なのは同じものではなくて、似たようなものを作ることです。似たようなものを作るということは、その中に例えば色んな触媒作用をするものもいて、それが核酸を合成して RNA を作り、次いで遺伝暗号を作ったのではないかというわけです。

２００６年の４月に京都大学出版会から池原健二さんが『GADV 仮説　生命起源を問い直す』という著書を出版しました。そこで提唱している「GADV 仮説」を見ると確かにそうかもしれないと思うんですね。

一番最初に蛋白質があった。蛋白質は擬似複製というルールでもって、どんどん色んなものを作り出しました。それは、ルールを変えるというよりも、編み出していったわけですね。

だから、生命以前は物理化学のルールしかないから決定論的なルールに従ってやったのだけれど、そこからある恣意的で拘束性をもった生命のルールが編み出されていきました。言ってみれば、それが一番最初の進化でした。

そういう風にして、遺伝的なコードができてきます。最初の遺伝的なコードは、４パターンしかなかったらしい。それが１６パターン、６４パターンと増えていき、そういう風に出来上がると、それが一つの拘束性になるんですよ。

単純にいうと遺伝暗号が出来ると、アミノ酸は皆そのルールに従って蛋白質になっていくから、別のやり方が出来なくなる。恐らく現在沢山の有機物があるのに自然発生しない理由は、単純に言うと、生物が死ぬと分解された物質を生きているやつが直ぐ使っちゃうからなんです。

現在生きている生物は、いっぱいいるでしょう。有機物は直ぐ生物の体に取り込まれて生物になってしまう。逆に言うと、全く生物がいないところで、沢山の有機物があれば、生物が出来る可能性がないことはありません。

しかし、何処にだって細菌はいるから、生命を作るという実験をしたとしても当然単純なバクテリアしか作れないだろうから誰も信用しませんね。絶対に「コンタミ」だって言われますね。要するに滅菌したと言ったって、本当かなというだろうし、「コンタミネート（汚染）」されて入ってきたに違いないよと言われればおしまいです。コンタミじゃないことを証明することは極めて難しい。

だから生命が出来たというレポートは、とりあえず出ないのです。誰も信用しないから。けれども全く変な形の生物を作ってしまえば信用しますよ。それで同じような条件にして、同じ様な形の生物が出来たとあればね。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ただ今言ったように同じのが出来るというのは、「アービトラリー（恣意性）」と言うこととはちょっと違いますね。同じものはなかなか出来ない。できた後はそれに拘束されるけどね。そういう意味で生命を作るというというのは、偶有性に支配されるのかもしれません。

ただ僕がさっき言ったように、もし生命が「物質の配置」であるならば、何兆もの物質をある配置の下にきちんと置けば、生物は出来ると思います。だから何かうまいやり方で沢山の物質を一遍に貼り付けるような装置でも誰か開発すれば、２１世紀には生物を作ることが流行るかもしれないですね。

◉中間領域

さて、これまで生物の話をしてきましたが、次に社会とからめた話をしましょう。生物と言うものが段々複雑になると断層性がでてきますね。その細胞の中に高分子があってルールに従って細胞同士がくっついていきます。その結果、組織なり器官なり個体ができるのです。

細胞がまとまっただけでは、システムとしてはそう簡単には動かないんです。真核生物が出来たのが今から２０億年位前で真核生物は原核生物の共生によってできたと考えられている。二つのシステムが合体したわけですが、この「共生」はなかなか難しい。もし A というシステムのルールが、他方の B というシステムのルールをそれに包摂するようだったら、前者のシステムに後者のシステムが吸収されてしまうわけです。

問題は、A と B が異なるルールをもっていたとして、それがくっついた時に新しいシステムが立ち上がる可能性があるかないかということです。そういうことは偶発的に起き、それが真核生物のオリジンですね。

例えば真核生物の中に入っているミトコンドリアとか、葉緑体などは、もともと別のものだったと考えられますね。それらが上手いこと真核生物の中に入っていったのでしょう。そのほとんどは、共生へといたらず、恐らく死んでしまいました。偶然上手くいったものが現在の真核生物の起源になって今も生きている。歴史的に見ると、まずミトコンドリアが入り、次に葉緑体が入ってきたのです。だから、そういう意味では、植物の方が動物より遅く出てくる。実際に化石の記録など見ても、植物の方が動物よりも遥かに遅く出ています。また、きのことかカビなどの菌類では、確かに栄養的に見て菌類も我々もヘテロトロフィック、要するに他の有機物を摂って生きています。植物だけは自らの光合成で生きていますから、ちょっと違いますよね。そのことを考えると面白いですね。

真核生物は、２０億年位前にできたんだけど、多細胞になるのに大変な時間がかかっている。真核生物の歴史は２０億年あるわけですよ。多細胞になったのは１０億年位前ですから、その内の半分は単細胞で生活していたわけです。ということは逆に言うと単細胞の間に色んな試行錯誤したのだろうけれど、なかなか多細胞生物を生み出すがことができなかった。それが如何に困難だったかということですよ。

多細胞生物になったとたんに、あっという間に我々生物は進化することになります。必

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ず細胞と個体（インデイヴィジュアル）の間には、色んな中間項がある。そうしないと恐らくシステムはうまく機能しないんです。

人間の社会には、国家というものがあります。国家は最終的には個人で構成されるが、その間に色んな中間項すなわち媒介項があります。それは「緩衝材（バッファー）」と言ってもいい。農耕以前の社会では集団は小さく、せいぜい１００人くらいでした。それで中間項が余りなくとも何とか破綻しなかったが、集団が大きくなるとそうはいかない。

例えば、媒体やバッファーがなくて細胞のかたまりだけで、細胞数が巨大になるとシステムとしての統制がとれなくなり、システム全体が駄目になる確率が高いと思います。媒体項があれば誤魔化して何とか出来るということが幾らでもあると思う。

我々の体なんかも、細胞と個体の媒介項として免疫系があります。免疫系は、自己と非自己を区別するシステムでこれがないと個体はすぐに死んでしまう。色んな媒介項を使用することで騙し騙しやれるのが生物の特徴なのですよ。

その時にやっぱり生物の特徴は、厳密なルールがあって､それに全て従っているということではないのだよね。さっきから言っているように、もともと生物というのは、いい加減なシステムなのが当たり前なのです。それを厳密にやろうとすると上手くいかない。当然どんぶり勘定になるのですよ。変化する情況に対応するにはその方がうまくいくのですね。

最近、僕らが社会的なものを見ていて一番具合が悪いなと思うのは、法治国家が前面に出てきて、途中がなくなっちゃっていることです。個人がいきなり法治国家と直につながっている。そうすると何が起こるかというと、個人を律するために、国家の方で何でもかんでも細かいルールを決めなくてはいけなくなってしまう。

日本なんてこの１０年ちょっとで法律が２００以上増えたのだよね。何でもいいから法律を作って、細かくルールを決める。煙草はそこでは吸ってはいけませんとか。そのような具合に国からの規制によって、個人の行動を直接規制しているのが現代なのですよ。

昔の法は大まかで良かった。個人と国家の間の中間領域にバッファーがいっぱいあったからです。様々な問題をそこで調整できた。そういうのがやっぱりなくなっちゃって困るところが多いと思います。昔は中間領域で機能していた共同体があったからね。

◉生物と人間とのアナロジーや社会との関係

さて、社会と個人としての人間の大きな違いは、一つだけありますね。例えば､社会的な組織、まず家族があって、その上に例えば会社や大学のような機関があって、その上にもっと大きな共同体である国だとか地方自治体がありますね。社会の場合は、上が駄目になっても、下の個人としての人間は死にません。だから個人というのは極端なことを云うと、国が潰れようが、家族が崩壊しようが、個人そのものは死なないでしょう。

しかし、個人が死ねばその下の器官、組織細胞などは全部死ぬわけです。例えば一人の人間が約６０兆の個体の細胞によって構成されていますが、個人が死んだら、それらの細胞も一緒に死ぬわけですよ。個体としての生物というのは、色んな歪みが生じて上手く行

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

かなくなったとき、丸ごと死んでしまう。

社会というのは、個人が死なない限り、また別の社会をつくりだすことができる。例えば大日本帝国がぐじゃぐじゃになって崩れたけれど、その時に生きていた人達は全部死んだかというと、ほとんど死なないで次の国家システムを平気で作ったでしょう。だけど人間と言うのは、例えば私の体にいろんな病気ができて私が死ねば私の細胞は全部死ぬから、私というのは無くなっちゃって終わりになっちゃうでのすよ。そういう所が違っているのですね。

だから、そこを余りにも人間の身体や生物の身体と社会をアナロジーで結びつけると、すごい全体主義的な話になってきて具合が悪くなってしまいます。個体というのは上から見ても下から見ても、ここが結節線だね。生物学的にも社会学的にも最高次の存在なのです。

我々の中の細胞は、個体から見れば実は少々なくてもいいようなものがいっぱいある。だからそれらの個々の細胞は死んでもいいのでしょう。単純に私が生きるためには私の体は、どんどん細胞を殺しているわけです。癌抑制遺伝子であるＰ５３は癌になりそうな細胞を見つけて皆殺しにしているわけですよ。

だから疑わしきは罰しちゃう。身体はあやしい細胞を殺すことで生きているわけですよ。それと同じことを社会でやろうとすると恐いですね。だから生物のアナロジーを社会に持ち込んでいくと恐いことになります。個体が生きるために、個々の細胞を殺すのだから、国が生きるために、その細胞である個人は死ねという話になるとおかしくなります。だから生物と社会はちょっと違う。

我々は、身体の中で非常に簡単に自分の細胞を殺します。例えば風邪が治るというのは、皆ウイルスを殺すと思っていますが、実はそうじゃなくてウイルスに感染した細胞を殺しているのです。ウイルスも勿論殺しますよ。だけどウイルスに感染した細胞をそのままにしておくと面倒くさいから、ウイルスに感染した細胞と言うのは、感染したという旗を立てているんです。T 細胞というのが、その感染した旗のついた細胞を見つけて殺してしまうんです。

だからね、我々の体の中は、細胞の殺戮機械でものすごい大殺戮をやっているんですよ。他にも例えば免疫で胸腺というのがあるでしょう。胸腺は、免疫細胞（T 細胞）の教育器官と呼ばれていますけれど、それは口ばっかりで、実際のところ殺戮器官なのです。ある社会主義国では教育キャンプと言うのは人殺しの機関だったから、確かに教育器官といえばそうなのだろうけれど。

その胸腺で教育される T 細胞が何故僕たち自身を攻撃しないかというと、T 細胞は,「自己」と「非自己」を区別できるからです。T 細胞は、僕たちの中の体に入ってくる異物を区別して、これを攻撃できるんです。それではなぜ T 細胞が自己を攻撃しないかというと、T 細胞はランダムにものすごく沢山の種類の細胞が作られて、あるものは自己を攻撃し、あるものは他者を攻撃するのだけれども自己を攻撃する細胞は胸腺で殺されてしまうのです。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

骨髄から供給される幹細胞が胸腺で教育されて T 細胞になって出てくるというのだけれど、教育じゃなくて T 細胞として役に立たないものは全部殺されるのですね。役に立たたない細胞や危険なやつを全部そこで殺しておくのです。

それで女の人はなんで自己免疫病が多いのかというと、多分、女の人はそこから免れて自己を攻撃する T 細胞が男より多いからじゃないかと思います。この理屈はものすごく難しい。女の人は XX という染色体があって、男は XY ですね。そこで X 染色体というのは、実は二つ発現すると、蛋白質が過剰になって死んでしまう。だから、男は X 一個しかないから常にその X が働いていて、女の人は二つの X の内の片一方はマスクされているので働いていないのですよ。人間の場合でも、たまたま XXX や XXY なんて人がいるでしょう。そんな人は一つしか働いていません。

変な話ですが、筋ジストロフィーの患者さんで X 遺伝子に原因がある人がいます。男の一卵性双生児の場合だと片方が筋ジスになると、もう片方も必ず筋ジスになるけれど、女の人は場合によって、この遺伝病では、一卵性双生児で遺伝病にもかかわらず、片方の一卵性双生児は筋ジス、もう片方は筋ジスじゃないっていうのが時々出ます。

何故かっていうと、X 染色体がヘテロの女の子で片方の X は正常、片方は筋ジスだとするとたまたま、筋肉になる元の細胞の多くで筋ジスの X 染色体が働いてしまって、筋ジスに働いた方は筋ジスになり易いでしょう。だけどそうじゃなくて、大部分の筋肉細胞で正常の X 染色体が働いている子は筋ジスにならない。胸腺の T 細胞を教育する細胞も女の子の場合では片方の X しか働いていない。そこで自分と異なる X 染色体の作る蛋白質を攻撃するものとみなして、殺されないことがあるわけです。するとこれは自己を攻撃する T 細胞になってしまうかもしれない。

このような難しい理屈があるのだけれども、女の人の方が自己免疫病が多いのは間違いないですね。男の７倍か１０倍近く多いかな。例えば膠原病とかには女の人ははるかになり易い。それにもかかわらず女の人の寿命は男より長いわけだな。女の人の寿命が長いという理由は、XY に関係していますね。当たり前の話だけど、X 染色体を二つ持っていると寿命が長いのです。

大抵の病気というのは劣性で、だから X が病気に関係しているとして、女の人は XX 二つ駄目にならなければ病気にならない。男は、X 一つダメになると病気になる。正常遺伝子と病原遺伝子が１対１であれば、男の場合は５０％の確率で病気になる。女の人は、２５％の確率でしか病気にならない。あとは、正常/正常、正常/異常、正常/異常の場合は全部正常になってしまうから、７５％は正常になって、２５％しか病気にならない。女の人の方が長生きするのは当然ですよ。寿命が長いことと,自己免疫が多いことは、表裏一体なのですね。

さて、生物と人間のアナロジーというのは、危険なものもあるし、そうじゃないのもあります。人間の社会は、ガラガラポンしても、個人という要素さえ残っていれば、また組み直すことができるわけ。だから会社なんか潰れたって、また別の会社を作ることができ

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

る。他方の生物の場合はクラッシュを起しちゃうと、もう元が駄目になってしまうから、ニッチもサッチもいかない。だからそういう意味で、生物の方が改革するのがとっても難しい。つまり保守的なのですよね。

反対に社会の方は革命が起こりやすい。生物の革命は簡単には起らないし、もし起こったとしても大方の生物は死んでしまいます。つまり、革命を起しても死ななかった生物というのは、極めて珍しい。さっきの真核生物というのは、革命をおこして真核生物になったわけですね。それは恐らく大変なことだったと思いますよ。生物は色々な試行錯誤したのに、ほとんどの場合上手くいかずに潰れてしまったのです。だから生物で一回駄目になっちゃったシステムというのは、また元どおりになって出てくることがないのです。

例えば、グールドは、カンブリア紀のバージェス頁岩の動物達を考察して、門の数が進化史の初期に最大で１００位あるというのだけど、まあ今考えると少しおおげさで、それでも５０位門がある。今動物の門は３７あるから、１３は絶滅したのですよ。やはり、一回絶滅しちゃうともうできない。というのも生物のシステムは、今あるものからしか作れないから、一度絶滅しちゃうと、それと同じシステムを作り出すことは非常に難しい。元のシステムがあれば出来るかもしれないけれども、今もうこうやって進んでいっちゃったシステムがあって、そのシステムを元に戻して新しくまた同じものを作ることは、とっても生物では難しいのです。

というのも、生物は「拘束性」があるからです。生物は、自分の生きているシステムの中で自分自身をどんどん作りますよね。そうすると現行のシステムを変えようとしても、うまくやらないと、システムがクラッシュを起して死んでしまう可能性が高い。システムを変化させても死なないケースは、稀であると考えたほうがよいと思います。現行のシステムを温存したまま、上に何か付け加えるという場合はなんとかなることが多いです。だからそういうことを考えると、生物というのは、複雑になるのは簡単、単純になるのは難しいのです。

例えば、寄生虫などは、外見が単純になっても、実は複雑なシステムは温存したまま見かけ上は単純になりました。寄生虫を調べてみると、実はすごく複雑です。最終的に単純そうに見えるけれども、昔ヘッケルが言ったように、生物というものは個体発生が系統発生を繰り返えすように見えます。というのも個体発生の最後にくっついたものは比較的上手くいくからなのですよ。そうすると、結果的に系統発生を繰り返したように見える。途中で変えちゃうことは容易ではないけど、上手くいく場合もあります。途中で変えることも出来るんだけども、発生の重要な所で変えることができないのです。元の方を変えちゃうと、生物のシステムが死んでしまい、その結果、生きられなくなってしまうからね。

社会の場合はクラッシュを起したって、個人が死ぬことはないのだけど、生き辛くなることは確かですね。生き辛くならないためには、現在のシステムをある程度温存したまま変えるやり方をとることが必要なのですね。

現行のシステムに馴致されるから、それが急に変わったからといって、人々は、それに

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

あわせて合理的な行動がとれません。

それからもう一つ生物と人間の社会が違うところを言うと、生物の中の要素である細胞は、全体のことなんか何も知らないということです。これはとても重要なことで、生物は、システムなのだけれども、それを構成している諸要素は皆言ってみれば局所的なルールに従って勝手に運動している。けれども全体として外から見た時にうまく釣り合いがとれているシステムなのです。

ところが人間のシステムというのは局所的であるといっても、例えば憲法や法律を知っているし人もいるし、知らない人もいる。全体を知っていると思って動いているシステムと、知らないで勝手に動いているシステムは、やはり違います。恐らく昔は大多数の人は、それに近かったかもしれません。国のことなんか何も知らずに、局所的なことしかわからないということでやっていたわけでしょう。

例えば今でも赤ん坊なんかは、母ちゃんと父ちゃんとその辺のことしか知らないし、ましてや日本がどうなっているか誰も知らないで生活していますね。だけど全部がそんな具合だと社会のシステムは成り立たたない。他方の生物の方はそれでもシステムが成り立っちゃうということが凄いんだよね。

「局所的ルールと全体との関係」という問題は、面白いですね。生物はローカルなルールしか知りません。物質は全部そうですね。ローカルなルールしか知らなくても、何か上手く出来ちゃうというのが、オートポイエーシスの特徴ですよね。それで尚且つ、全体がうまくバランスをとりつつ適当に変わり、最後は、それなりの同一性を保っているわけです。

８月の終わりに河本英夫さんと何かの研究会で一緒になりました。河本さんは、オートポイエーシスばかりやっているけど、オートポイエーシスは、郡司君の研究とも関連がある。ただオートポイエーシスは、現象をうまく解読していこうというものですが、郡司君の場合はもっと根本的なところから理屈を作り出していくのが凄いね。

そこで社会というものをどう認識するかということに関してですが、決定論か、偶然かという二極的な見方ではなく、時系列的に変化を取り込んでいる可能性を考えてみたいですね。そのやり方としては、変化そのものを規定しているメタ・ルールみたいなものを記述するか、あるいは、拘束性みたいなものを上手く考えながらそこに適度に恣意性を入れてやっていくのか、恐らく、その変化を規定しているメタ・ルールみたいなことを考えると上手く行かないと思います。

昔の考え方は、やはり決定論的な考え方なのですよ。要するになるべく包括的なルールを考えてそれで演繹的に全てを説明する。しかし、これはある局面でしかできなくて、全部やろうとすると難しいよね。対象がでかくなればなるほど、決定論的に説明することができなくなります。だから、やはりある程度アドホックに考えていくべきでしょう。現状はこれだから、次にどうなるかということを考えた時に、「例えばこういう風にしたらどうなるだろうか」と幾つもの選択肢について比較考慮していくべきでしょう。そうでないと

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

予測はまずはずれますよ。

例えば、小泉元首相や竹中平蔵さんが変革をやりましたが、あれは、アメリカ流の近代経済主義で、一番の市場主義なのですね。あの近代経済学の市場主義というのは、人間が経済的に合理的に動くとう前提に基づいています。

ところが実際の人間は、その人の育った習慣とか、その人の頭の中の幻想などに縛られているから合理的に動かないのです。だから、そこに必ず歪みが生じます。すると予測はまずはずれる。だから、合理性一本槍でやってしまうことは、とっても危険なことです。例えば、株でも買って損をしてみれば直ぐ分ります。株の取引は、現状しかないのですから、得をしていても損をしていても、その時々判断で取引をしていくのが一番賢いです。

だけど、例えば自分が３００円で買った株が２００円になってしまい、もっと下がると思っていたとしても、もしかしたら３００円に上がるかもしれないから売らずに持つということを必ずやります。それは、現状ではなく、それ以前の条件に捉われているからです。しかし、その時に例えば２２０円で買って、１０％下がったら売ろうと思っている人は、たいして損してないから２００円に下がったら売ってしまいますね。３００円で買った人は、下がると思ってもなかなか売れない。

けれども合理的に計算するのだったら、自分が買った値段は考えなくて、その株は上がるか下がるかを見ていればいいんです。下がると思ったら株は売るしかないし、上がると思ったら持っているしかありませんが、自分が買った値段に引きずられちゃいますね。自分が１００円で買った株が５０円になったとしても、なかなか株は売れない。

そういうことってやっぱりあって、人間は合理的に行動しないのです。そこを合理的に行動できるかということなのです。それは、「合理性」と言っても、「メタレベルの合理性」とはちょっと違い、むしろ「アドホックな合理性」、言わば「知恵」みたいなものですね。

病気になった時、昔のことを考えて徹底的に良くなりたいというふうなことを思うのと、取り敢えず現状からはじめて、その中でどうにか上手く誤魔化して生きるというのは、ちょっと違いますね。

例えば、癌にかかって手術をしたいと考える時に、完治するかもしれないという幻想がある。その場合やっぱり昔の元気だった時に戻りたいと考えてしまいがちです。癌であっても何時死ぬか分らないのだから、騙し騙し生きるという選択肢をとるというのが合理的なのかもしれないけど、なかなか難しい。

僕の知り合いで、つい最近亡くなった中村登流さんという鳥の有名な先生がいるんだけど、彼は、脳梗塞と胃癌を患い、医者は胃癌が転移してないようだから切った方がいいと言ったらしいけれど、「いや、俺はもう手術は嫌だから、頑張るよ」と言って、それで３年間位頑張ったけれど亡くなってしまいました。しかし、もし手術していたら、もっと早く亡くなっていたかもしれません。でもそれは全部後知恵です。家族は手術をして亡くなったら、これしか仕様がないと思うかもしれないけれどね。

もう一つは、人間というのは苦しいままで宙ぶらりんみたいにして生きるということが、

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

しんどいですよね。だからどっちかに決めちゃいたいところがあるでしょう。そこが、なかなか難しいところです。ぐじぐじと頑張るとか、騙し騙し生きるのは難しいのです。僕らは、騙し騙し思想したり、うじうじと頑張るのだとか何時でも言っていますけれどね。ぐずぐず生きるのは、やっぱりなかなか難しい。だから人間は原理主義的になり易いのかもしれないね。

高橋：本日はありがとうございました。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

研究会講師プロフィール

●第1回研究会　講師

内山　節（うちやま・たかし）

１９５０年生まれ。哲学者。現在、立教大学大学院教授。群馬県上野村と東京での二重生活をおくっている。旧来の学問枠組みに捉われることなく、自然と労働について独自の思索を重ね、現代におけるローカリティの重要性を説く。著書に『自然と労働』（ともに農文協）、『自然と人間の哲学』（岩波書店）、『哲学の冒険』（平凡社）、『貨幣の思想史』『里の在処』『「里」という思想』（ともに新潮社）、『戦争という仕事』（信濃毎日新聞社）、『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』（講談社現代新書）など多数。

●第2回研究会　講師

赤坂　憲雄（あかさか・のりお）

１９５３年生まれ。東京大学文学部卒業。現在、東北芸術工科大学大学院長、同東北文化研究センター所長。福島県立博物館館長。責任編集による『東北学』を１９９９年に創刊し、その後『季刊東北学』（柏書房）として刊行されている。東北学という新たなジャンルを切り開く。著書に『異人論序説』『排除の現象学』『王と天皇』（ともに筑摩学芸文庫）、『東西／南北学』（岩波書店）など多数。先頃『岡本太郎の見た日本』（岩波書店）でドゥマゴ文学賞（２００７）、芸術選奨文部科学大臣賞（２００８）を受賞した。

●第3回研究会　講師

池田　清彦（いけだ・きよひこ）

１９４７年生まれ。東京都立大学大学院博士課程修了。現在、早稲田大学国際教養学部教授。ソシュールの構造主義言語学などの影響を受け、構造主義生物学を提唱する。無類の昆虫愛好家。専門の枠組みに捉われない活発な文筆活動を行っている。著書に『構造主義科学論の冒険』（毎日新聞社）、『構造主義と進化論』（鳴海社）、『分類という思想』（新潮社選書）、『生命の形式―同一性と時間』（哲学書房）、『虫の思想史』（講談社学術文庫）、『さよならダーヴィニズム―構造主義進化論講義』（講談社新書メチエ）など多数。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

音楽療法士 那須弓子さんとのヒアリングから得られたこと

ヒアリング日：2008年1月29日

音楽療法士として末期医療のための緩和ケアで活動されている那須弓子さんのお話は、研究会という枠組みではなく本研究メンバーによるヒアリングという形で行われました。これは、那須さんが研究者というよりは実践家として、私たちの考えるホスピタリティの活動現場に関わっていらっしゃるからです。

そこでは、ホスピタリティ概念にとっての最も重要な前提となる、個々人の「生命」、あるいはそれを体現する「身体」や「感性・感情」の問題が、那須さんの日ごろの実践を通して得られた体験をもとにアクチュアルな形で語られています。その内容は報告書本編の「序説」における「＜声＞の抑圧」「五感」の内容にとって大きな触発となりました。したがって那須さんのお話が、研究会の枠組みの中で行われた報告の内容に寸部も劣らない重要な内容を含んでいたことをまず最初に申し上げておきたいと思います。

＊参考：「音楽療法士」とは・・・

一般的に病気や障害を持つ人が、音楽を聴いたり、奏でたりすることで、脈拍数や体温がかわるなどの生理的変化が起こり、不安や鬱状態を和らげることで、痛みを緩和する手助けにもなります。そのような音楽の持つ生理的、心理的な働きを応用して、意図的、計画的に行う治療プロセスを実践する専門職で日本での歴史はまだ浅い。

今回の那須弓子さんは、現在ホスピスでの末期医療の現場で実践されています。

◉「自分が失われる」こと

那須弓子さんは、日赤広尾病院を中心に、「緩和ケア」において音楽療法を通じて末期段階を迎えた患者さんたちの苦痛を和らげるための療養活動を実践されている方です。しかしお話しを聞くうちに、那須さんのお仕事がたんに患者さんの苦痛の緩和のための療養活動というだけにとどまらない、患者さんの存在全体との深い関わりを含むものであることが分かってきました。それは、人間の生と死の根源に触れ合うことといってもよいように思います。その意味で那須さんのお話は本研究の根幹に関わる重要かつ貴重な内容を含んでいます。

那須さんのお話で最も重要なポイントとなっているのは、緩和ケアへ来る患者さんたちがおおむね混乱状態に陥るということです。那須さんはそれを、「自分が失われる」こととして捉えていらっしゃいますが、ではこの「自分が失われる」ことというのはいったいどのような事態を意味するのでしょうか。たぶん多くの人はそれを、「自我が失われる」こととして理解するでしょう。つまり自分を支えてきたアイデンティティの源泉としての「自

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

分は自分である」という意識、言い換えれば自己意識というものが、自分というものの本質であるとふつうは考えられているからです。それをもう少し拡張してゆけば、「思考する」とか「判断を下す」とか「意志を持つ」とかといった要素がそこには加わってゆきます。

しかしながら「自分」の本質とはそうした自己意識としての自我にほんとうに還元できるものなのでしょうか。患者さんが自分の頭で考え自分の意志で緩和ケアに入り、そこでそれまでの患者さんの「自分」にとっては未知であった状況に向き合ったとき起こる、この「自分が失われる」という混乱は、たしかに自我のゆらぎという側面を持っているのですが、どうもそれだけには還元できない要素を同時に含んでいるように思えます。それは、「自分」が失われることによって生じるある新たな出会いや覚醒、さらには自分の存在の根源において起こる何ものかの獲得の機会とさえ言えるような事態でもあるのではないかと思います。

◉自明性の喪失

ヒアリングの際に触れましたが、ドイツの精神医学者 W・ブランケンブルクの『自明性の喪失』という著作のことがここで想い起こされます（邦訳　木村敏他訳　みすず書房）。ブランケンブルクはこの本でアンネ・ラウという女性の分裂病患者の症例を扱っているのですが、彼女は２０歳の頃から「あたりまえ」、つまり「自明であること」が理解できなくなっていたのでした。つまり彼女にとって彼女の病である分裂病は、「自明性」が失われるという事態として現われたのです。私たちがふつうの生活の中で何気なく行っている様々な行為が、彼女には大変な努力なしには成し遂げられないことになってしまったのでした。この自明性が失われた状態は逆に私たちの日常的な世界がどのように成り立っているのかを浮かび上がらせてくれます。私たちは日常生活の中で格別思考したり意志したり努力したりすることなしに様々な行為を行っています。「ものを食べる」「ドアを開ける」「ベッドに横になる」等々どんな行為でも、私たちは「あたりまえ」のようにそれらを自然に行っています。それを可能にしているのがブランケンブルクのいう「自明性の構造」です。そのうちに自我の要素が含まれることはいうまでもありませんが、同時にそれだけが自明性を支えているわけでもありません。自我の働き以上に重要な役割を果たしているのは、身体の次元において成立する、「体性感覚」（中村雄二郎）的な自分という存在の統一性・統合性です。メルロ＝ポンティなら「身体図式」と呼ぶところのものです。それは「あたりまえ」であるがゆえにふだんはほとんど意識されることがないものです。アンネ・ラウのように何らかの要因で自明性が失われて初めて、そうした意識ではなく身体に根ざした存在の次元における統一性・統合性が自分というものの基盤となっていることが明らかになるのです。

那須さんが接しておられる患者さんたちもまた、病の末期段階に至り緩和ケアへと入所することによってそうした自明性をはぎとられてしまった状態になっているのではないでしょうか。そして自明性が失われることによって自分もまた失われてゆくことを強く感じ

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ているのではないでしょうか。と同時にそうであるからこそ、そうした自明性の構造によって支えられていた自分という存在の根源に触れ合う瞬間を体験しているとも言えるのではないかと思います。その存在の根源が自分の生の本質であることはいうまでもありません。ある意味では皮肉なことに、生が失われようとする瞬間に――それは、自明性が失われる瞬間でもあります――、生の本質とは何かが初めて浮上してくるのです。那須さんのお仕事はこの浮上してきた生の本質を、もう一度患者さんの「自分」へと、言い換えれば患者さんの存在の全体性へと再統合させようとすることではないでしょうか。そしてそれは同時に、自明性の構造のうちに隠れてしまっている私たちの生およびそれに支えられている私たちの存在の本質を浮かび上がらせることによって、真の意味での自己発見を促すということでもあります。

◉音楽の意味

そのための媒介が音楽であることもたいへん興味深いと思います。音楽の本質をどのように捉えるかはいろいろ議論のあるところですが、とりあえずその原型に「声」があることは間違いないだろうと思います。クラシックの声楽を勉強されたことのある那須さんは、あるとき習っていたシャンソンの先生に、「あなたの歌には呼吸がない」といわれたそうです。このことが那須さんの歌というものに対する認識の深まりの出発点となりました。音楽の原型というべき歌＝声の根源にあるものが呼吸であるということは極めて示唆的であると思います。古代ギリシャにおいて呼吸を表す言葉であった「プネウマ」は、同時に「霊魂」、あるいは「神聖なる霊」を表す言葉でもありました。すなわち万物の存在をその根源においてつかさどる霊的なものに呼吸（プネウマ）は深く関わっているということです。それは先ほど述べたことに引きつけていえば、呼吸によって支えられている歌＝声と、私たちの存在の根源である生の本質とが深いところで結びつきあっているということを意味します。さらにいえば、呼吸は「吸う」と「吐く」の交互の繰り返しですから、呼吸には音楽の重要な要素であるリズム・拍動の要素も含まれています。そしてこの呼吸＝リズムはそのまま生の根源的なリズムでもあります。歌＝声とリズムの総合を通じて作り出される音楽の世界は、深く私たちの存在の根源、生の根源へと分け入って、ふだんの生活の中では抑圧され覆い隠されているこの存在＝生の根源への目覚め、気づきを強く促してくれるのです。それは２００６年度の報告書における言葉で表せば、awareness に他なりません。この目覚め、気づきの中で、初めて私たちの存在＝生の根源が解放され開示されるのだといってもよいかもしれません。もちろんそれをもたらすのは音楽だけではありません。優れた芸術作品が与えてくれる感動、愛おしい存在に対する深い愛情、記憶を通じた過去や死者の蘇りなどもまた私たちにそうした目覚め、気づきをもたらしてくれます。それはちょうど凍りついた川が春を迎えて再び流れ出す瞬間のようなものかもしれません。音楽を通してすべてのものが生き生きと生命のリズムを刻み始めるのです。恐らく音楽が大切なのは、こうした瞬間を他の何にも増して鮮烈に体験し実感する瞬間をもたらしてくれる

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

からだろうと思います。音楽がしばしば心のそこに眠っている記憶を蘇らしてくれるのも、そうした目覚め、気づきの力によるといえるでしょう。音楽療法を通して目指されているのは、まさにそうした瞬間を患者さんたちの内部に喚起するということなのではないかと思います。目覚め、気づきの瞬間が体験されることによって患者さんたちの生が、そしてそれに根ざす「自分」が再び生き生きと律動し始めるとき、例えその後に来るものが死であったとしても、患者さんたちの内部で「よき生」が、根源的な形でもう一度鮮やかに蘇るのです。このよき生によってよき死もまたもたらされます。那須さんのお話の中でいちばん感動的であったのは在日韓国人の女性の「アリラン」をめぐる挿話でした。

ガンの末期患者として入院してこられたそのお婆さんは、戦前から日本に住まわれていたようですが、経済的に豊かだったけれども、不幸にも家族関係に恵まれず悲しい人生を過ごされてきたそうです。入院してきた際、そのお婆さんは、既に日本語も韓国語もままならない状態でしたが、その後、次第に意識が混濁しはじめ錯乱状態に陥って「ワーワー」と叫ぶようにったそうです。そのお婆さんが錯乱状態のなかで発していたその言葉にならない叫びを、その呼吸の在りようから「韓国語」であると直感した那須さんは、大急ぎで、その呼吸に合いそうな韓国語の「アリラン」の入ったＣＤを入手し、そのお婆さんに聞かせたそうです。そうすると、怖ろしい叫びが収まり、そのお婆さんは、にっこりわらって「ありがとう」と那須さんにおっしゃられたそうです。そして、しばしの間、その場で那須さんと一緒に歌い続けたのです。それをきっかけに病状も一時的に回復したそのお婆さんは、那須さんに、「アリラン」の歌詞の内容に共鳴する彼女の人生の物語を語って聞かせたそうです。その後、不和であった家族との関係を改善することができたお婆さんは、声を取り戻してから約二週間後にお亡くなりになったそうです。この「アリラン」をきっかけにして「記憶」と「よき生」を回復したお婆さんの挿話は、音楽療法による「生の根源への気づき・開示」を証立てています。

【出席者】

高橋順一　（早稲田大学教授）
清家竜介　（早稲田大学 非常勤講師,日本経済復興協会特別研究員）
足立裕子　（文化技術デザイン）

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ホスピタリティの研究
～持続型社会の設計原理を明らかにするために～
―ホスピタリティ概念の＜根源＞にあるもの―（別冊）
講演・取材録

2008年３月31日　　発行

財団法人 ハイライフ研究所

〒104-0031 東京都中央区京橋 3-6-12
正栄ビル５階
TEL　03-3563-8686
FAX　03-3563-7987
http://www.hilife.or.jp

＊ 本書の全部または一部の複写・複製・転訳載および磁気または光記録媒体への入力等を禁じます。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp